検証テーマ『青少年の活動、青少年団体の活動』

検証担当委員　速水 順一郎

(社)兵庫県子ども会連合会常務理事兼事務局長

（要　約）

1　検証のねらい

阪神・淡路大震災から10年が経過しようとしている今、様々な視点で検証が行われているが、青少年の視点から検証されたものは殆ど無い。

そこで、青少年が保護される立場だけでなく、自ら進んで学校での活動や復興への取り組みを行い、自身の悲しみやショックを乗り越え逞しく生きる力を培う姿など、青少年の目線に立って震災を捉えることとした。

また、この震災は青少年を取り巻く青少年関係団体の活動にも変化をもたらしている。震災を契機に団体の活動内容や取り組み方針にも変化がみられ、地域とのつながりにおいても新たな方向が模索されてきた。

以下、独自に実施したアンケート調査、個別ヒアリングに基づき、青少年を取り巻く環境の変化やそれに伴う青少年の心と行動の変化、青少年関係団体の活動や地域との関係といった観点から復興を検証し、災害時等における対応や青少年育成のあり方について提案していく。

2　検証項目と検証の視点

(1) 検証項目

青少年たちは親や親戚、親しい友人を亡くしたこと、自分自身も建物の下敷きとなったこと、学校の被災により授業をはじめとした学校行事が行われない不安、避難所となった学校においては、学校生活と避難所との共生など、かつてない経験をした。

この経験は、青少年の心や活動にも様々な影響を与えたほか青少年関係団体等の活動にも少なからず影響を及ぼした。

検証では、青少年や青少年関係団体の心と活動の変化や地域との関わりについて観ていくこととし、具体的な検証項目としては、「震災による青少年を取り巻く環境の変化」、「青少年の心の変化と活動」、「青少年団体等の活動と地域との関わり」の3点とし、この中で青少年や教師の心の動きや新たな取り組みへの挑戦、地域とのつながりの重要性などについて検証してみる。

(2) 検証の視点

震災は青少年の心や進路にどのような影響をもたらしたのか、或いは従来より青少年は保護される立場にあるという固定観念があったが、復旧・復興にどのように貢献してきたのか、という視点で検証していく。

また、学校が避難所となったことにより、教師はどのように対応してきたのか、青少年の振る舞いが、大人達にどんな影響を与えてきたのかという視点など、青少年や青少年団体等の立場から復旧・復興の状況を検証し、青少年の心のケアや青少年活動のあり方、青少年や青少年団体と地域との関係等について、今後の方向性などを提言していく。

３　10 年の歩み

(1) 震災による青少年を取り巻く環境の変化

ア　経験したことのない衝撃

世界で起こっている大災害をマスメディアで承知している大人にとっても、このような未曾有の大災害は、大きな衝撃であったが、青少年たちにとっては、まさに青天の霹靂のような出来事であった。自宅が崩壊し、これまでの生活とは一変して、寒い中学校の体育館や教室で避難所生活を強いられた。また、心の拠り所とも言える友人に会えないという不安が青少年を取り巻いていた。

イ　はじめての避難所生活（親戚宅での生活）

避難所における共同生活は、普段の生活とは比べものにならない環境変化を伴うものであり青少年にも大きなストレスを与えた。

この避難所生活において最も辛かったのは、プライバシーが無かったというのが多くの青少年の意見であった。

ウ　学校の被災

神戸市の本山第二小学校では、校舎が別館を除き全壊状態であったため、近隣の複数の小学校に間借りして授業を行っていた。また、神戸市の鷹取中学校では学校以外の施設（須磨水族園）で授業を行うなど、通い慣れた学校で勉強できないという環境に直面することとなった。

エ　避難所と学業の両立

避難者が居られる状態における授業、救援物資の搬入が頻繁に行われる中での授業など、生徒達は精神的にも物理的にも従来のように普通に授業ができない環境下におかれていた。

しかし、避難所と学校の共存といった場面は、意外な効用ももたらした。鷹取中学校においては、避難者から授業を見学させて欲しいという申し出を受け入れた。生徒達にとっては、避難者との共同生活という通常とは違う学校生活を経験することとなった。

オ　教師の苦悩と新たな挑戦

生徒達に一日も早く通常の学校生活を取り戻してやりたいという思いは、小・中・高等学校を問わず全ての教師に共通するものであろう。

芦屋南高等学校では、避難所から通う生徒の日常生活を安定させることに力を注ぎ震災後 3～4 日後に生徒を集め授業を再開している。

一方、被害の大きかった鷹取中学校では、早期の通常授業再開が望めないこともあり、避難者の授業見学や生徒の進路指導にあたっても避難者に講師をお願いするなど、新たな試みを行う教師もいた。

(2) 青少年の心の変化と活動（働き）

復旧・復興においては、青少年の活動が大きな役割を果たした。特に避難所等におけるボランティア活動は、被災者の心のケアをはじめ避難所トイレの清掃や物資の配給など多岐にわたり円滑な復興に大きく貢献したと考えられる。また、青少年自身にも生徒相互の心の繋がりはもとより、緊急時には地域と一体となった取り組みが必要なことを痛感させたようである。

ア　心の変化

震災直後における青少年の心は他の被災者のために何かしてあげたい、何か役に立ちたいという気持ちよりも大震災から受けたショックの方が大きかったようである。

復旧・復興期になってくると、青少年の心にも変化が見られ、学校で一生懸命働いているボランティアの姿を見て、勉強も大事であるが「自分にも何か出来ることはないのか？」と考えるようになってきた。

ボランティア活動により青少年達は地域とのつながりの大切さや自分の喜びや存在感を確認できたとともに、新たな自分の生きがいを見出した。また、進路への影響として

は、震災により大学受験をあきらめたケース、ヘルパーになったケース、震災の教訓を情報発信するためのNPO法人で活躍することとなったケースがある。或いは、消防士、看護士、保育士で活躍している者など、震災は生徒の人生に大きなインパクトを与えたことが明らかとなった。

一方では、県立舞子高校に環境防災科が設置されるなど震災は学校の専門学科の設定や当時小学生であった児童の進学にも影響を与えた。

イ　青少年活動（働き）

震災直後は、青少年活動というよりもむしろ「行動」と表現した方が適切であるかも知れない。最初にとった行動は自身の避難行動は別にして、倒壊家屋からの身内の救済であった。

復旧・復興期になると、いよいよ本格的な「活動」が開始されることとなる。ある子ども会や小学校区においては、子供達がグループを組んで普段の活動区域内において動き回った。友達の安否確認をはじめ、高齢者が一人で居られる場所など、 被災者にとって有用な情報を収集してくれた。

また、別の観点からは、子供達の「元気」が大人を和ませてくれたということも見逃してはならない活動の一つである。

更に、鷹取中学校ではボランティア活動が他の中学・高校も巻き込んで広がったが、助け合うことの大切さが体験を通して解ってきたことの現れではないかと思われる。

(3) 青少年団体等の活動と地域との関わり

震災を契機として青少年関係団体の活動にも大きな変化がみられた。これらの団体は青少年の健全育成などを目的に震災前から地域活動や社会奉仕活動、自然体験やスポーツ活動などを展開していたが、震災を契機に新たな取り組みが展開されたケースもあった。

また、遺児、孤児などの青少年を支援する団体においては、震災を契機に、これまでと全く違った施設を設置するなどの取り組みが見られた。

ア　青少年に関する活動

(ｱ) 一時保育活動（家庭養護促進協会）

家の被災や仕事の都合により短期的、一時的に子どものお世話をする里親を募集、斡旋した。

(ｲ) 出張保育（西神戸 YMCA 保育園）

自らの保育園が被災したにもかかわらず、保育ボランティアや心のケアボランティアを募集し、避難所における子どもたちのストレスを解消するため、出張保育を実施した。

(ｳ) 臨時保育室の設置（神戸市私立保育園連盟）

被災後まもなく、神戸市私立保育園連盟の「阪神大震災対策本部」を設置するとともに、各保育園と市福祉事務所が連携しながら仮設住宅の設置による保育園児の移動に対応するため、可能な限り保育定員を臨時的に増加させ保育にあたった。

(ｴ) おもちゃステーション（兵庫県子ども会連合会）

家を失った子ども達の気持ちを癒し、子どもらしい暮らしに役立てるため、おもちゃステーションを設置し、各避難所等に配給した。

イ　新たな取り組み

(ｱ) 民間団体における新たな取り組み

ａ　神戸真生塾　ロータリー子どもの家

世界各地のロータリークラブからの義援金をもとに、平成７年秋に建設された施設である。建設後から翌年の４月までは子どもの一時保育に取り組み、６月からは六甲アイランドの仮設住宅で暮らしている親子を対象に「もみの木ひろば」という訪問活動が行われた。

一方で、子どもの家活動は、地域の子どもを対象にした木工教室、野外活動や子

育て支援、心のケアなどにも広がっていった。

b　あしなが育英会　レインボーハウス

震災で親を亡くした遺児の傷ついた心を癒す家として、特別な設計のもとに1999年1月に建設された施設である。

この震災を契機に全国でも初の施設として整備されたものであり、まさに新たな活動の代表的な例であろう。この施設においては、職員も24時間体制で勤務しており、継続的、日常的な対応が可能となっている。また、この施設は地域とのつながりも深く、心のプログラムの手伝いも地元の主婦などがボランティアとして活動している。

c　社会福祉法人のぞみ会　浜風の家

震災の遺児や孤児、被災児のための心のケアを目的に平成11年1月にオープンした。この施設がレインボーハウスと異なる点は、ケア対象が被災遺児に限らず、児童館としての機能も有している点である。

この施設においても、イベントや日常活動の開催にあたっては、地域からのボランティアを募集しており、ここにおいても地域と一体となった活動が行われている。

d　阪神大震災子どもケアネットワーク事業

毎日新聞社が中心となり、高校や大学進学者の奨学金制度を創設するとともに、震災で疲れた子ども達をリフレッシュさせるケア施設「希望王国」の建設や何でも相談できるお兄さんお姉さん的な役割であるユースサポート隊を養成するなど、被災児童の心のケアに焦点をあてた事業を展開した。

(ｲ) 行政における新たな取り組み

行政においても震災を契機に新たな青少年施策が展開されている。この施策の中には、震災後に新たに取り組んだものの他、震災前から取り組んできた施策を被災青少年への支援という観点から拡充したものがある。今回の震災により、この人と人、人と家庭、人と地域のつながりが青少年の健全育成はもとより、災害などの緊急時には復旧・復興に大きな役割を果たすことが再認識される結果となった。

a　ひょうごっ子きょうだいづくり事業

小・中学生を中心とした青少年の異年齢交流、異世代交流による地域活動を促進し、思いやりのあるこころ豊かな青少年を育成していくとともに、青少年活動を核とした地域社会の活性化を図ろうとする事業である。

b　仮設住宅地域スポーツ遊具設置事業

仮設住宅地域で生活する青少年が遊びやスポーツを通じて、気楽に楽しみながら震災で疲れた心と体のリフレッシュを図り、異年齢、異世代間の交流を図っていくため、スポーツ遊具を設置する事業である。

c　ウィークエンド・子どもいきいき体験事業

学校の完全週休二日制の本格実施に合わせて、子ども達の地域における多彩な体験活動を促進し、子ども達の社会参加を促進する。

d　子どもの冒険ひろばパイロット事業

子ども達が遊びなどを通じて生きる力を育んでいけるよう、旺盛な好奇心やエネルギーを発散させ、のびのびと生きていく力を養う場を設定する事業である。(主に小・中学生)

e　若者ゆうゆう広場事業

若者が学校や家庭以外で、気軽に立ち寄り、集まった仲間とおしゃべりや音楽、スポーツなどを自由に行いながら楽しく交流できる場を設定する事業である。(主に中・高生)

f　トライやる・ウィーク

震災や児童殺傷事件を踏まえ、心の教育の充実を図ることにより、児童生徒一人

ひとりが自分の生き方を見つけるよう支援するため、体験を通して子どもが自ら体得する場や機会を提供する事業である。

ｇ　「ひょうごの匠」キャラバン隊派遣事業

若者のものづくり離れに対処するとともに、技能のすばらしさ、楽しさ、難しさを体験することにより、青少年に対する技能の伝承及び技能尊重気運を醸成していくため、県が認定した技能者を県内の中学校に派遣する事業である。

ウ　青少年団体等の地域との関わり

青少年活動をみてきたが、地域との関わりが活動の迅速さや成否に大きな影響を与えていることがわかった。

青少年関係団体も同様であり、施設が地域から独立して存在することはあり得ないこともヒアリング等の結果によって明らかとなった。

地域イベントの合同開催や協力をしていくことは、青少年に社会参加の機会を与え地域の一員として地域における青少年の居場所をつくることにつながり、青少年が自分の存在を再認識することにもつながっていくのではないだろうか。青少年関係団体と地域とは、青少年を育成していくためにも、緊急時の対応においても密接な関わりがあることは明らかである。

4　復興 10 年の総括評価

今度の検証では、通常時においても、緊急時においても結局は、人間（青少年）として社会（地域）の一員として、さらには家族の一員として、そのどの場面においてもきちんと青少年が自分の存在を実感できることが重要ではないかと考えるに至った。

特に、コミュニティの最小単位とも言える家庭や徐々に社会参加していくための入り口である周辺地域との関係、続いて学校や友達との関係など、青少年の育成には欠かせない関係が重層的に構築されている。

こういった各段階で青少年が自身の位置づけや役割を明確に認識できることが、社会参加の第一歩と言えるのではないか。

また、学校や青少年団体においても、この震災を契機として地域を巻き込んだ取り組みを展開することの重要性を再認識することとなった。

学校という施設を避難者と共同利用することが、結果として学校を地域に開き、地域における役割を強めたとも言えるのではないか。

さらに、青少年を支える団体は支援施設の建設、運営を通じて地域との関わりを深めていった。

つまり、個人と個人、個人と家庭、地域、学校、団体等とのつながりの重要性を認識し、緊急時にも平常時にもそれぞれが「協働」して取り組める体制づくりを進めることが、今求められていると考える。

5　今後の取り組み方向

(1) 青少年の健康な成長に向けた取り組み

震災で青少年のひきこもりや不登校生がボランティア活動をきっかけに自分の存在意義が見いだせたことにより、ひきこもり等から立ち直ったばかりか、新たな生き甲斐を見つけ出し、現在も社会人の一員として生き生きと活動するようになった。

震災をきっかけとした活動が青少年の健康な成長にもつながっていくということに着目せざるを得ない。

ここでは、青少年が自らの居場所を見つけ出し、その役割を果たしていくことを支援するための取り組みについて提案したい。

ア　青少年の心の問題への対応

(ｱ) 悩みを真剣に聞いてくれる相談の充実

子ども達は悩みや現状を聞いてくれる身近な大人達を求めている。

そのためには、地域の大人達が普段からあいさつや声かけを通じて人間関係をつくり、相談相手となることも効果的である。子ども達と真剣に向かい合う意欲のある人材と気軽に立ち寄って相談できる場所を確保する。

(ｲ) 同じ境遇におかれた者が本音で話せる機会の確保

つらい体験をした者がお互いの心情を打ち明け、思いを共有することが立ち直りのきっかけとなることがある。そのため、同じ境遇にある者同士がうち解けて本音で話ができるような会の開催を支援する。

(ｳ) 地域で大人との出会いの場をつくる

地域には様々な技術や知識を有した人が存在するが、日頃からあいさつや声かけを促進していくためにも、こういった専門家が子ども達に色々な技を教える機会を設ける。

イ　青少年の体験活動の充実

(ｱ) 子ども達が自由に遊べる場所の拡大

震災の時、子ども達の笑顔や「元気」が大人たちを和ませ、ボランティア活動が復興の大きな力になったことは前に述べた。

県でモデル事業として実施している「子ども冒険ひろば」をより身近な単位で開設していくなどの取り組みが必要である。

また、これと同時に子ども達を遊びに誘う中高生や大学生年代の遊びのリーダーを養成していくことも大切である。

(ｲ) トライやる活動の拡大

教育委員会において中学２年生を対象とした「トライやる・ウィーク」が実施されているが、このような社会体験活動を一過性のものにとどめることなく、地域住民の参画と協働のもと、全ての子ども達が参加できる活動へと拡充していく必要がある。

(ｳ) 家族同士の体験交流

社会生活において、それぞれの家のルールやマナーを習得させるために、身近なところで数家族が共同生活を行ったり、友人の家に泊まりいく機会を創出する。

(ｴ) 野外活動機会の拡大

子ども達に色々な経験をさせることは、仲間づくりはもとより、社会での基本的な生活技術を身につける絶好の機会であるため、あまりプログラムにこだわらない野外活動を体験できる機会をつくる。

ウ　青少年の居場所づくりの推進

(ｱ) 青少年が気軽に立ち寄り、交流ができる場所の拡大

被災青少年の心のケアにおいては、本音で話が出来る友人や大人の聞き手が存在することが、大切であることがわかった。

県でモデル事業として実施している「若者ゆうゆう広場事業」をより身近な単位で開設していくなどの取組みが必要である

(2) 地域コミュニティの機能強化に向けた取り組み

青少年が地域の中で自分の居場所を見つけ、地域コミュニティの一員としての自覚のもと、生き生きと生活することは重要な意味を持っている。

緊急時における対応の迅速さからも、地域づくりは最大の防災であるとも言え、地域コミュニティの機能強化に向けた取り組みを提案したい。

ア　青少年の地域活動への参加促進

(ｱ) 地域事業のモデルチェンジ(子どもの視点の導入、子どもの参画)

子どもを地域の一員として捉え、子ども達の豊かな発想を地域事業の企画に参加させることにより、地域の担い手としての認識を深める。

また、子ども達が関心を持つ分野について、地域内でクラブ活動に参加できる機会

を設定するとともに、地域活動を行っている団体の連携とネットワーク化を図っていくことも重要である。

(ｲ) 年齢に応じたリーダーの役割

ボーイスカウトでは、年長の子ども達がその下の子ども達を世話しながら成長していく仕組みができている。子ども達はその年齢に応じたリーダーの役割を果たすことが出来るのではないか。

(ｳ) 地域防災コミュニティへの若い世代の参加

20代、30代が参加できるような仕組みづくりが必要である。若い世代が自らの震災体験を子ども達に伝えていくことも有益であるし、得意分野であるニューメディアを活用すれば活躍の場も広がっていくのではないか。

イ　青少年を地域で支え合う仕組みづくり

(ｱ) 地域コーディネーターの配置

子どもと大人の関係が疎遠になっている現実や少子・高齢化時代に見合った地域づくりを進めていくため、地域コーディネーターを配置し、子ども会、福祉活動、学校や自治体との連携を深める。

(ｲ) 地域活動におけるシニア世代の活用

地域と一体となった取り組みを促進していくためには、自治会や婦人会などの地域団体にも子ども達との交流の場を提供する新たな催しを発案してもらうことが肝要である。

団塊の世代をはじめとして、今後とも増加するシニア世代が地域活動に参加できるような仕組みづくりが必要である。

(ｳ) 施設運営や団体の運営における地域協力体制の確立

青少年に関わる団体の活動はますます重要性を増すことから、団体等の運営についても出来る限り、地域からのボランティアを募集するなど、地域と一体となった組織運営に努めていく。

(ｴ) 青少年団体への支援強化

復旧・復興において青少年団体の活動は地域とのつながりによって、より効果をあげることがわかった。このため、各団体が共通して取り組むための人材育成やプログラム開発を行う必要がある。

(ｵ) 子どもを家庭に受け入れる経験づくり

小学校区に一家庭の「里親」のような子どもを受け入れる家庭があれば、子どもは自分の生活圏から離れずに暮らすことができると思われる。日頃から生活圏の中でお互いに子どもを預け合ったり、助け合ったりする顔のつながりが持てるような付き合いをしておくことが、非常時に大いに助けになるはずである。

（本　文）

1　検証のねらい

阪神・淡路大震災では、小・中・高等学校が緊急避難所となり、多くの被災者の方々が不便で不安な生活を送られていた。特に、震災直後は毛布などの救援物資がないまま体育館などで厳しい寒さと悲しみに耐えていた。

この避難所での生活は場所によって期間も様々であるが、避難所が学校であったということが、当時の学生、教師は勿論のこと避難者や地域にも大きな影響を与えていたことが分かってきた。

当然のことながら学校は教育の場である。緊急事態にしろ長期間にわたって学校が避難所としての機能を優先せざるを得なかったことは、生徒にも教師にも大きな負担を強いた。特に高校や大学受験を控えていた3年生にとっては、相当なプレッシャーを与えたものと推測できる。

しかし、この大災害が生徒（青少年）にとって、かつてない貴重な体験の場を提供したことも事実である。教科書に沿って決められたカリキュラムをこなしていく日常生活とは別に復旧・復興の過程で、生徒相互間、生徒と地域の人との間に新たな関係が構築されたのではないかと考えられる。

また、この大震災は生徒自身の進路、生き方にも大きな影響を及ぼしている。震災からの復旧・復興に携わったことにより、人生観に変化が生まれ、将来の人生設計を立て直した生徒も少なくなかった。

勿論、一部の方々は未だに震災の辛さや悲しみから脱却できずに苦悩の日々を送られていることも忘れてはならない。

一方、この震災は青少年のみならず、青少年を取り巻く青少年関係団体の活動にも変化をもたらしている。震災を契機に団体の活動内容や取り組み方針にも変化がみられ、地域との繋がりにおいても新たな方向が模索されてきた。

阪神・淡路大震災から10年が経過しようとしている今、様々な視点で検証が行われているが、青少年の視点からはほとんど検証されていない。

そこで、青少年が保護される立場だけでなく、自ら進んで学校での活動や復興への取り組みを行い、自身の悲しみやショックを乗り越え逞しく生きる力を培う姿など、青少年の目線に立って震災を捉えることとした。

以下、独自に実施したアンケート調査、個別ヒアリングに基づき、青少年を取り巻く環境の変化やそれに伴う青少年の心と活動の変化、青少年関係団体の活動や地域との関係といった観点から、復興の状況を検証し、災害時等における対応や今後の青少年育成のあり方等について提案をしていきたい。

2　検証項目と検証の視点

(1) 検証項目

震災発生直後から現在まで、青少年は実に様々な体験をしてきた。

特に、親や親戚、親しい友人を亡くしたこと、自分自身も建物の下敷きとなったこと、学校の被災により授業をはじめとした学校行事が行われない不安、避難所となった学校においては、学校生活と避難所との共生など、かつてない経験をした。

この経験は、千差万別ではあるが、青少年の心や活動にも様々な影響を与えたことは勿論のこと、震災前から青少年の育成に関する取り組みを行ってきた青少年関係団体の活動にも少なからず影響を及ぼした。

また、震災遺児や孤児などを支援する青少年支援団体の取り組みにも大きな変化をもたらした。

これら青少年や団体の変化や活動は、震災からの円滑な復旧・復興に大きく貢献したことも事実であることから、今回の検証では、青少年や青少年関係団体の心と活動の変化や地域との関わりについて見ていくこととする。

具体的な検証項目としては、「震災による青少年を取り巻く環境の変化」、「青少年の心の変化と活動」及び「青少年団体等の活動と地域との関わり」の3点とし、この中で青少年や教師の心の動きや新たな取り組みへの挑戦、地域とのつながりの重要性などについて検証してみる。

(2) 検証の視点

以上のような項目に沿って検証を行うことにより、震災は青少年の心や進路にどのような影響をもたらしたのか、或いは従来より青少年は保護される立場にあるという固定観念があったが、大震災を経験したことにより、復旧・復興にどのように貢献してきたのか、という視点で検証していく。

また、学業の場である学校が避難所となったことにより、教師はどのように対応してきたのか、青少年の純粋な振る舞いが、大人達にどんな影響を与えてきたのかという視点など、青少年の立場や青少年団体等の立場から復旧・復興の状況を検証し、青少年の心のケアや青少年活動のあり方、青少年や青少年団体と地域との関係等について、今後の方向性などを提言していく。

3　10年の歩み

震災によって多くの青少年が心身共に大きな衝撃を受けたことは、当時の生徒の作文集はもとより新聞報道などにより明らかである。ここでは、時系列的に正確に捉えることは困難ではあるが、教師や当時の生徒のヒアリングを踏まえて青少年を取り巻く環境の変化について述べてみる。

(1) 震災による青少年を取り巻く環境の変化

ア　初動対応期（震災直後）

(ｱ) 経験したことのない衝撃

毎年のように世界各国や日本のどこかで地震をはじめ、集中豪雨などの自然災害が発生し、多くの犠牲者が生まれている。また、中東や東欧地域においては、民族問題などに起因した戦争や内乱などの悲惨な事件が相次いでいるが、このようなことを新聞やニュース等で知る機会の多い大人にとっても、あの大震災は未曾有の経験であった。

戦争を経験された高齢者にとっても、何の予告もなく一瞬にして家屋や親族を失わせたあの震災は、それまでの生活を一変させる大きな出来事であった。

このような大災害は、平和な日本に暮らす青少年にとっては、まさに青天の霹靂のような出来事であった。幸いにして、この度の調査に多くの方々に協力いただいたが、未だに震災の事を思い出したくない、或いは震災以降、家に引きこもりがちで人と話すことも出来ないという被災者が居られることがヒアリングによっても明らかとなった。

(ｲ) 自宅の損壊

自宅が崩壊し、一番の安住の地である家を無くした者もおり、これまでの生活とは一変して、寒い中学校の体育館や教室で避難所生活を強いられた。また、崩壊と同時に親、兄弟姉妹、祖父母などの親族が死亡したことにより物心面で大きく環境が変化

した。

また、この損壊に伴い水道や電気、ガスなどのライフラインが途絶えたことにより、かつてない不便で不安な生活を余儀なくされ、ライフライン復旧までは、冷たい食べ物、近くの川や給水車からの水運び、長期間風呂に入れないなどからくるストレスも膨らむ一方であった。

(ｳ) 友人や親戚と会えない不安

家族の安否はもとより、昨日まで楽しく会話していた友人、被災地内の親戚の安否については、殆ど情報が入らない状況にあった。

いわば、世間から孤立した状態におかれたことから、目の前で起こった悲惨な状況に加え、心の拠り所とも言える友人に会えないという不安が青少年を取り巻いていた。

こういった中、日常の行動範囲が比較的狭い範囲に限定されている小学生は、近所の子どもと一緒になって友達の安否確認や高齢者等がおかれている状況把握、水の在処探しを行ったケースも見受けられた。

友人の住まいが自宅から離れ散在し、行動範囲が広くなる中・高生は、やはり友人や学校の状況が把握できない不安やもどかしさが先立ったようである。

イ　復旧・復興期（避難所～仮設住宅期）

(ｱ) はじめての避難所生活（親戚宅での生活）

自宅が全壊又は一部損壊となった者は、期間の長短は別にして、避難所での生活を余儀なくされた。これは、普段の生活とは比べものにならない環境変化を伴うものであり、避難所における共同生活は青少年にも大きなストレスを与えた。ましてや身内を亡くした青少年にとって避難所生活は、まさに大変な苦痛を伴ったことは容易に想像できる。

この避難所生活において最も辛かったのは、プライバシーが無かったというのが多くの青少年の意見であった。これは恐らく大人にとっても同様であったろう。また、毛布などの寝具が不足し、寒さを我慢しなければならなかったこと、配給される食事は冷たいものであったことも青少年に新たな試練を与えたようである。

(ｲ) 学校の被災

被災により長期間にわたり授業や学校行事ができない学校があった。神戸市の本山第二小学校では、校舎が別館を除き全壊状態であったため、近隣の複数の小学校に間借りして授業を行っていた。

また、運動場も仮設テントが設置してあったことから、運動もできない状況にあったが、避難者の協力を得て卒業式だけは運動場で行った。

また、神戸市の鷹取中学校では学校以外の施設（須磨水族園）で授業を行うなど、通い慣れた学校で勉強できないという環境に直面することとなった。

(ｳ) 避難所と学業の両立

言うまでもなく学校は勉学の場であるが、緊急避難所となっていた学校においては、大半の教室や体育館を避難者用に提供している事例、自衛隊の基地あるいは救援物資の集積場となっていた事例があった。

前述のとおり、他の学校や施設を利用して授業を行っていた学校も時間の経過に伴い、元の学校で授業が再開することとなるが、避難者が居られる状態における授業、救援物資の搬入が頻繁に行われる中での授業など、生徒は精神的にも物理的にも従来のように普通に授業ができない環境下におかれていた。

しかし、避難所と学校の共存といった場面は、意外な効用ももたらした。鷹取中学校においては、隣の教室に避難者が居られる状況での授業であったことから、避難者から授業を見学させて欲しいという申し出があった。生徒は同じ被災者ということもあり、これに理解を示し申し入れを受けることとなった。このことが避難者にとっても一つの心のケアにもつながっていったのではないかと思われる。

いずれにしても生徒にとっては、避難者との共同生活という通常とは違う学校生活を経験することとなった。

(ｴ) 教師の苦悩と新たな挑戦

学校が被災して授業ができない状況、或いは教室、体育館、運動場など学校施設の一部が避難所として利用され、本来の授業ができない状況となっていたとしても、生徒に一日も早く通常の学校生活を取り戻してやりたいという思いは、小・中・高等学校を問わず全ての教師に共通するものであろう。

特に、高校や大学受験を控えた学校にあっては、教師と生徒それぞれに焦りとプレッシャーが蓄積していたことは想像に難くない。

芦屋南高等学校では、避難所から通う生徒の日常生活を安定させること、非常時とはいえいつまでも特別な扱いは生徒にとっても良くないとの考えのもと、幸い学校の被害も少なかったこともあり、授業再開に全力を傾注し、震災後 3～4 日後に生徒を集め授業を再開している。

一方、被害の大きかった鷹取中学校では、早期の通常授業再開が望めないこともあり、先程の避難者の授業見学や生徒の進路指導にあたっても避難者に講師をお願いするなど、新たな試みに挑んだ教師もいた。

勿論、通常の教育プログラムがこなせないことによる保護者や教育委員会の焦りもあったであろうが、現場の教師、生徒はそれ以上に新しい環境への対応に苦慮していた。

これら青少年を取り巻く環境はアンケートやヒアリングによると、事例は千差万別であったにせよ、震災直後から復旧、復興過程において大きな変化を来したことは明らかである。

鷹取中学校では、学校が避難所となったことを「生き方教育」のチャンスとして捉え、ボランティア活動、福祉教育の場として積極的に学校を開放し、地域住民との交流を展開していった。

【地震直後の生徒の様子はどうだったか】

鷹取中学だけでなかったと思われるが、避難所で手伝いをしている姿が目立っていた。小中学生も茫然自失の状況であった。地域外からの避難してきた生徒も居り、人間関係もなかったので、どうなるかと思ったが、6つぐらいの学校から来ていた生徒達もすんなりとチームを作って活動していたことに驚いた。

普段であれば、生徒指導上よその中学校に行くことはまかりならんという状況であるが、緊急であったことからこうなった。

教科書を使っての勉強再開の目処がたっていない状況のなかで、ボランティアも一つの勉強であると考えた。頑張って出来ることはやろうという教師の手書きのメッセージを生徒達に渡した。

教師としては避難所のことばかりに手を取られている訳にはいかなかった。鷹取中の場合は2月に入って須磨水族園で授業が再開できた。その後、教室の空き状況により学校における授業に移行していったが、この授業も一種のボランティアのようであった。

隣の教室に避難者が居られる状況の中、おじいちゃんやおばあちゃんが授業を見学したいという申し出があり、公開授業とした。

年配の中には教科書を求める者もいたが、たまたま余分に配給されていたので、教科書を教室に設置した。当然小さな子どもも教室に入ってきた。同じ被災者ということで生徒達は理解を示してくれたことから、避難住民との共生が可能となったが、これもボランティア活動の一つかなと思った。

当時の中学校教師からのヒアリング（抜粋）

(2) 青少年の心の変化と活動（働き）

復旧・復興においては、青少年の活動が大きな役割を果たした。特に避難所等におけるボランティア活動は、被災者の心のケアをはじめ避難所トイレの清掃や物資の配給など多岐にわたり、円滑な復興に大きく貢献したと考えられる。

また、青少年自身も生徒相互の心の繋がりはもとより、緊急時には地域と一体となった取り組みが必要なことを痛感したようである。

被災年齢により状況も異なっているが、ここではアンケートやヒアリング結果から明らかとなった活動を中心に述べたい。

ア　心の変化

(7) 初動対応期（震災直後）

青少年を取り巻く環境の変化の項でも少し触れたが、震災直後における青少年の心は他の被災者のために何かしてあげたい、何か役に立ちたいという気持ちよりも大震災から受けたショックの方が大きかったようである。つまり、自分のこと、家族や友達のことで精一杯であった。

中でも、家族や親しい友人、親戚を亡くした青少年にあっては、言うまでもないことであった。

一方、避難所や家でライフラインが復旧しない中、避難生活を送っていた時に周辺の市町や全国から食料や衣服などの救援物資が送られ、時間が経てば食料が配給されるということも関係したのか、被災直後からしばらくの間は「被災者は被災者以外の者が助けてくれるもの」という漠然とした認識もあったようである。

なお、ある教師の感想であるが、避難所生活をはじめた最初の頃は、生徒達はキャンプのような高揚した気分にあるようにも見えたという。これは、その当時大人達の方が落ち込んでいたということの裏返しかも知れない。

ある中学校では平成７年度の１学期の目標として「避難所のひとたちに気持ちのよいあいさつをしよう」と決めて実践し、生徒と避難住民との間により深い気持ちの交流ができたようである。

【心の変化に関する作文集は巻末に添付】

【親との関係などで悩んだことはあるか】

震災によって親子関係がダメになった。子どもを亡くした後の母は、亡くした事によるショックが大きく、生きている者、特に私に目を向けなくなった。

はじめの頃は、このような母を支えてあげなくてはと思っていたが、4～5年も続くと親にあたるようになってしまった。（自分は居ても居なくてもどうでもよいのかと母に言い寄ったりした）

一方では自傷行為も続いていた。これは親に対する信号のようなものだったが、親には伝わらなかった。それで家を飛び出してしまった。しかし、家を離れてはじめて今の状況を客観的に判断できるようになり、普通に親子関係が保てるようになった。

それと、先の事を考えず一週間先に楽しく生きていれればいいと考えるようになった。震災の後、親ともよく大喧嘩して、顔も見たくないと思っていたが、落ち着いて考えると、地震であんなに、悲しい思いをしたんだから、少しでも長く生きて欲しいと思うようになった。

【こんな場所があれば、こんな人が居れば、心の悩みを解決してくれる。又は心が安らぐといった提案はあるか】

本気で話を聞いてくれる人がいることです。友達でも良いが、何回も同じ話をされると友達も嫌になると思う。私の場合はずっと聞いてくれる友達が居たし、私が、自傷行為をしているときも本気で殴ってくれたりしたので、その行為をやめることもできた。

この間、心のケアセンターに見学にいったが、専門的なことばかりで私たちのように、話をする場所が欲しいだけの人が集まれる場所とは違っていた。

同じ気持ちで話せる人が欲しい。気軽にいける相談所が必要。専門家でなくてもいいので、本当に必要な時に聞いてくれる人は大事ですね。

当時の中学生からのヒアリング（抜粋）

(ｲ) 復旧・復興期（避難所～仮設住宅期）

○友人や親戚等の安否確認も終わった頃
○避難所生活にも一定のルールが出来上がり、救援物資も安定して配給されだした頃
○全国からのボランティアによる活動が活発化してきた頃
○避難者は居られるが学校が再開された頃
○仮設住宅への入居が始まった頃

ａ　何かできないか、何もしなくてもいいのか

この時期になってくると、青少年の心にも変化が見られ、学校で一生懸命働いているボランティアの姿を見て、勉強も大事であるが「自分にも何か出来ることはないのか？」「本当に自分は何もしなくてもいいのか？」と考えるようになってきた。また、避難所で生活している生徒は、避難所で寂しい思いをしている高齢者、無口で一人佇んでいる高齢者を見て「何か助けてあげることはできないか？」と思うようになった。ある小学生は、高齢者がガレージで生活している様子を見て「何かしてあげたい」と思い、食べ物や水を運んでいくといった行動を起こした。

ｂ　助け合うことの大切さ

自宅の近所で家の下敷きになった人を助け出す、損壊した家屋の修繕や後かたづけ、あるいは配給された支援物資の分配などにおいては、家族、親戚といった垣根を越えて、みんなで力を合わせて協力、助け合う場面が多く見られた。

また、避難所で生活している青少年は、家から持ち寄った品物をお互いに使用し

たり、分け合うなどして助け合っていた。

こういった様々なところで助け合いの場面を目の当たりにした青少年達は困った時の助け合いの有り難さ、大切さを実感した。

c　地域とのつながりの大切さ

震災を契機に青少年たちがボランティア活動を展開したことは次章で詳しく述べるが、このボランティア活動を通じて青少年達は地域とのつながりの大切さを学んだ。

一部の学校では震災前から地域とのつながりがあったが、多くの学校は必ずしも地域とのつながりは強くなかった。

この学校と地域とのつながりについては、小・中・高等学校によっても自ずと違いが出てくる。大変大ざっぱな区分ではあるが、学校が生徒の生活圏に近いほど学校と地域とのつながりが深いように思える。

つまり、小学校、中学校、高等学校といった順につながりが浅くなっているように思える。小学校に比べて中学校、高等学校の生徒は自宅から学校までの距離も長くなっている。一つの要因としては、高校の生徒は普段暮らしている地域とは遠く離れた学校に通学しているため、学校の近隣地域に愛着が湧いてこないこともあるのではないだろうか。

こういった情勢の中で震災が発生したことにより、これまで、家庭や学校の中だけで終わっていた生徒の生活が、ボランティア活動により地域における自分の居場所へとつながった。ボランティア活動によって地域と一緒に苦難を乗り越えていくことのと大切さ、すばらしさを実感するようになった。

d　新たな生きがい

青少年がボランティア活動を行うきっかけは、この項の最初で述べたが、ここでは、もう一つのきっかけについて述べてみる。

ヒアリングで明らかとなったのは、何かの手伝いをした時に相手から「ありがとう」とお礼を言われたことが、青少年の心を大きく動かしたようである。

人から「ありがとう」の一言を言われる機会が少ない青少年にとって、このたった一言の言葉が心に熱く焼き付いたのであろう。

普段ほめられることの少ない青少年が感謝の言葉を掛けられたことを本当に嬉しく思い、自分の存在感を確認できたことが次の行動につながっていったものと考えられる。

このことは換言すれば、青少年は家族も含めて人との付き合いが希薄になった社会に生きているということなのだろう。

携帯電話やインターネットなどの情報化の進展に伴い、青少年相互間はもとより家族間でさえも顔と顔を合わせてお互いの意思疎通を図ることが少なくなった現代の特徴、便利さのマイナス部分と言えるのではないか。

社会批評はこれで止めておくが、このような自分の喜びや存在感を確かめられたことにより、ボランティア活動をはじめとした人助けをすることに新たな自分の生きがいを見出したことも事実として述べておきたい。

次に、ボランティア活動が不登校やひきこもりがちな生徒、或いは学校の枠に収まらない少し反抗的な生徒の心にも変化をもたらしたことについても触れておきたい。

このような青少年はいわゆる学校に馴染めない生徒とも言えるが、彼らにも「ありがとう」の一言や、たまたま学校に立ち寄った時に教師から手伝いを依頼されたことにより、自分の居場所や生きがいを見つけボランティア活動を続けるようになり、これを契機として登校することになった例も複数見受けられた。

こういった変化は、良い意味で青少年の人生に大きな影響を与えたことは言うま

でもない。

【授業再開まで子ども達はどうしていたのか】

学校の様子を見にきた子どもがおり、たまたま教師が手伝うよう声をかけたところ、ボランティアグループが結成され、子供達が自主的に活動していた。

例えば、中学生や高学年が低学年の子どもを運動場の隅に集めて遊んでくれるとか、物資を配達するとか色々なことをやっていた。

家が全半壊となった高齢者がガレージで生活されているとか、どこどこでは大量の水が出ているとか、あるいは恐怖心で家に閉じこもっている子どもが居るとか、子供達が情報を集めてくれていた。この情報に基づいて、子供達で物資を配っていた。

学校の避難所でも、水がない老人とかおしめの無い子どもが居るとかの情報を集めていたり、物資が到着するとハンドマイクで知らせたりしていた。

ある5年生の生徒は、元気のないお年寄りをみて、手作りの歌をつくり避難所だよりに掲載したこともあった。

また、過去に卒業した子どもが中学生になって不登校となっていたが、震災の騒ぎで学校を覗いたときに手伝いすることとなり、弁当を配ったときに「ありがとう」と感謝されたことが嬉しくて、また自分の存在感が確かめられたことから4月からは登校するようになった。（当時中学2年だったように思う）

当時の小学校教師からのヒアリング（抜粋）

【子どもに何を伝えたいか、何を学んで欲しいと思うか】

今の社会では人間関係のトラブルが多い。ボランティア活動が将来の人間関係づくりの訓練にもなる。イベントも開催当日よりも準備している時の方が好きである。

こういった付き合いが地域における私の居場所をつくってくれた。だから学校にも行けたような気がする

今の子どもはほめられる経験はあまりにも少ない。頼られると言うことはすごい自信につながると思う

【活動で一番印象に残っている出会いは何か】

大学中退者や休学、会社を辞めたり休んできている人がいたのに感動した。

これが活動にはまった一番のきっかけである。自分のことを中心に考えるのは嫌い。学校の廊下に人が寝ているのを見て勉強をする気にならなかった。

当時の中学生からのヒアリング（抜粋）

【ボランティアに対する意識変化】

震災後の調査によると「ボランティア活動に対する否定的な見方」は 10 ポイント以上の減少。また「ボランティア活動を身近なものとして捉え、関心を持つ生徒」は 25 ポイント、「実際に活動に参加するようになった生徒」は 10 ポイント増加している。全国からかけつけボランティア活動に励む人達、続々と送られてくる救援物資、中学校生徒会から届けられた励ましの手紙などに勇気づけられた生徒達は人の心の痛みがわかる一回り大きな人間へと成長したように思う。

ある中学校におけるボランティア活動に対する意識調査（抜粋）

e　進路への影響

震災は青少年の進路や生き方に大きな変化をもたらした。

震災で親や兄弟、親戚を亡くしたことにより、大学受験をあきらめたケース、ヘルパーになったケース、人とのつながりを大切にしたくて居酒屋に勤めたケース、震災の教訓を情報発信するための NPO 法人で活躍することとなったケースがある。或いは、ボランティア活動がきっかけとなり、NPO 法人、消防士、看護師、保育士で活躍している者、人助けに生きがいを見出したことにより盲学校の教師として活躍している者など、震災は生徒の人生に大きなインパクトを与えたことが明らかとなった。

また一方では、震災は学校の専門学科の設定や当時小学生であった児童にも進学に影響を与えた。

具体的には、震災の教訓を踏まえて防災教育を全国に発信、広めていくために平成 14 年 4 月から県立舞子高校に環境防災科が設置された。

この学科から生徒を送り出すのは、平成 17 年の 3 月を待つこととなるが、今後卒業生の皆さんの素晴らしい活躍が期待される。

今回の検証作業において、現在環境防災科に在籍する生徒にヒアリングする機会が与えられたので、ここでこの学科を選択したきっかけ、理由について触れておきたい。

やはり、震災当時の出来事が選択の大きな部分を占めていることがわかった。

父が消防士で救援に奔走していたことが印象に残っていたこと、震災当時に避難所で皆が助け合って暮らしていたことが印象に残っていたこと、或いは、もともと環境にも興味があったが、災害時に少しでも死者を減らすための勉強がしたいことなど、震災が大きなきっかけとなったようである。

他には環境保全や環境デザイン、看護師（南海地震が発生した場合にも看護師の立場で人助けがしたい：男性）、自分の力で人を助ける消防士など、当然ではあるが環境防災科に関係する職業を希望している。

【進路は変わったか】

高校も私立系に進学しハンドボールを続けたかったが、震災もあり金銭的にも無理と考え公立高校に進学することとした。

将来は普通のOLになると思っていたが、身近な妹を亡くして、人と触れあうことが大事と思うようになった。それまでは、おじいちゃん、お婆ちゃんが家にいるのが当たり前だったが、体も弱ってきたのをみて、ヘルパーになって、もしもの時は恩返し出来るようになりたいと思った。

当時の中学生からのヒアリング（抜粋）

【具体的な進路変更事例】

震災で親友をなくした子が、救急救命士になりましたし、その子は、震災前までは船に乗りたいと言っていたが、何か違うということで、救命士になりましたね。

その親友と人のためになる仕事をしようという約束がそれを決断させたそうです。

震災の時は、彼を助けることも何も出来なかった、誰かを助けられるのは救命士だと、大学を辞めて、救命士の道に飛び込んだんです。私の教え子ですけど。

御影工業高校の子供だったが、人との繋がりを大切にしたいということで、チェーン店の居酒屋に勤めたんですが、自分の店を持ちたいと、お母さんを亡くしたことで、人との繋がりを大切にしたり、仕事の大切さを教わったようです。

当時の中学校教師からのヒアリング（抜粋）

イ　青少年活動（働き）

(ｱ) 初動対応期（震災直後）

震災直後は、青少年活動というよりもむしろ「行動」と表現した方が適切であるかも知れない。

殆どの青少年は就寝中に突然激しい揺れにみまわれ、家の倒壊、家具の転倒や食器類の破損、中には自らが建物の下敷きとなった者も居た。このような状況の中で、最初にとった行動は自身の避難行動は別にして、倒壊家屋からの身内の救済であった。

時間の経過とともに、一部損壊の自宅にあっては、屋根の補修や建具の整理、破損家具の運び出し等を手伝っていた。

その後、近隣の倒壊家屋からの人命救済、友達や親戚の安否確認に奔走した例が多くみられた。

この状況の中で、比較的早く人命救済なり安否確認が可能となったのは、淡路の北淡町などであった。ここでは一日で安否確認が行われたが、これは普段から地域の状況が住民に知れわたっている。つまり従来からコミュニティ機能が充実しており、被災後も誰々が何処に住んでいるのか、家族構成はこうこうであるなどの情報が把握されていたためと思われる。

淡路の北淡東中学校（現北淡中学校）では、1 月の 19 日に生徒が初登校し、生徒会が中心となって自宅や近隣、親戚に食料などの救援物資を配給する手伝いを行った。

(ｲ) 復旧・復興期（避難所～仮設住宅期）

この時点から、いよいよ本格的な「活動」が開始されることとなる。直後の茫然自失とも言える時期を過ぎ、大災害に遭遇し被災したという現実を自分なりに認めたうえでの活動が開始されることとなる。

しかしながら、活動どころか、昨日まで一緒に遊んでいた友達、震災後に会う約束をしていた友人の死に直面した青少年の中には、「未だに死を認めたくない」という方がおられることも忘れてはならない。

先ず最初にふれておきたいことは、地域の子供達が元気に活動したことである。ある子ども会や小学校区においては、子供達がグループを組んで普段の活動区域内において動き回った。具体的には、友達の安否確認をはじめ、水道管が破裂して水が確保出来る場所、洗濯ができる川の位置、更には高齢者が一人で居られる場所やオムツを必要とする家の有無など、被災者にとって有用な情報を収集してくれた。

また、別の観点からは、子供たちの「元気」が大人を和ませてくれたということも見逃してはならない活動の一つである。

被災の大きさに戸惑い、経済的、精神的にも将来を危惧している大人の避難者にとって、子どもの元気な振る舞い、笑顔は何よりの救いとなったことはヒアリングの結果にも表れている。

次に、具体的なボランティア活動についてであるが、学校の中で、地域の中で、或いは施設において色々な活動を行っている。（一部重複）

○母校であった小学校における電話番、物資の配給献立表の作成
○避難所における物資の選別、避難者への配給（ガレージ暮らしの高齢者、幼児家庭への配給を含む。）
○学校のトイレの清掃
○放送設備を利用した校内放送、ハンドマイクによる情報提供
○部屋でじっとしている高齢者の巡回訪問
○施設（老人ホームなど）における手伝い
○配水車やプール、川からの水汲み
○小学校高学年による低学年の遊び

これは、実際に行われたボランティア活動なり自主的な手伝いの例であるが、ここ

で鷹取中学校におけるボランティア活動の広がりについて触れておきたい。

避難所では当学校の生徒がボランティア活動を行っていたが、避難所には他地域の学校の生徒もおり、人間関係もできあがっていなかったので、どうなるものかという心配があった。

6 つの学校から来ていたが、この生徒達もすんなりとチームをつくって活動をしていた。普段であれば他の中学校に行くことは禁止されているが、緊急時であったことからこのようになったようである。

詳しい活動であるが、隣の学校の中学生が校内放送を手伝っていたし、後からは高校生までが応援に駆けつけてくれるようになっていた。彼らは最初のうちは言われることしかやらなかったが、次第に自分たちで仕事を探すようになり、避難所の部屋の中でじっとしている高齢者を訪問するようになった。

この高齢者訪問は毎日同じ生徒が行けないことから、ちゃんと自分たちで日報をつくり引き継ぐことまで行っていたようである。

２月に入って全国社会福祉協議会と連絡がとれるようになってからは、全国からのボランティアが組織的に活動できるようになったが、これに並行するように、中学生や地元卒業生、自然発生的にできた高校生ボランティアが統合して活動するようになっていた。このことから、物資の仕分けや管理は高校生に任せることができたようである。

このボランティア活動の自然な広がりは、最初は自分も助けられたことにより、助け合うことの大切さが体験を通して解ってきたことの現れではないかと考えられる。

また、この学校にはベトナム人やペルー人など在日外国人や身体にハンディを持った人、高齢者などいろんな人たちが避難していたが、こうした人たちへの手助けを通じて生徒達はどんなすばらしい読み物の教材よりももっと重みのある人権学習の体験を積んでいくことができた。

【生徒達は具体的にどんなことを手伝ったのか】

ほとんど出来ることはやった。最初の一週間ぐらいは届いた物資を配給した。

一番大変だったのはトイレの掃除であった。これは長期間行っていた。

トイレの前に大きなポリバケツを設置し、最初の頃は池の水を運んできたり、プールの氷を割って運んで来たりしたが、トイレがあちこちにあるので本当に大変だった。

3日目ぐらいからは、北陸電力が電源車を運んできたことから、校内放送が使用できるようになったので、放送の手伝いをしていた。これは隣の太田中学校の生徒が2～3人で受け持っていた。

【震災が子どもの進路に大きな影響を与えたと思うし、良い変化があったと思うが】

被害を受け、失ったものは多いけれど、「助け合う事の大切さを学んだ」ということを生徒達はよく言っている。普通にある家族の団らんや電気や水、ガスの有り難さを痛感していたようである。家を失った子供が、ある家庭に電気が灯っているのを見ると涙がでると言っていた。

ゴンタな生徒は隣の小学校でボランティアにのめり込んでいたが、避難所が閉鎖になったとき「なぜ閉鎖するのか」と言っていた。その生徒にとってみれば避難所が居場所であり活動の場であったようだ。

生徒から相談を受け、老人ホームにお願いして放課後毎日ホームに通うようになった。1ヶ月もすれば施設の職員のような顔をして活動していた。

学校の枠の中に収まっていなかった生徒が、自分の居場所、生き甲斐を見つけていくことができることを痛感した。

不登校の生徒が水の配給場所で活動するようになっていた。小さい子どもの世話が好きみたいであった。この生徒は同年代ではコミュニケーションがとりにくい性格であったが高齢者や子供達とはうまくコミュニケーションが取れることが分かった。

教育の場面でもこういうことで可能性があるのではないかと感じた。

ボランティア活動を通じて地域とのつながりを実感したと思う。

当時の中学校教師からのヒアリング（抜粋）

(3) 青少年団体等の活動と地域との関わり

震災を契機として青少年関係団体の活動にも大きな変化がみられた。これらの団体は青少年の健全育成などを目的に震災前から地域活動や社会奉仕活動、自然体験やスポーツ活動などを展開していたが、震災を契機に新たな取り組みが展開されたケースもあった。

また、遺児、孤児などの青少年を支援する団体においては、震災を契機に、これまでと全く違った施設を設置するなどの取り組みが見られた。

このように、震災は青少年のみならず青少年を取り巻く団体の活動にも変化をもたらした。

更に、これらの団体は、震災前から地域活動や社会奉仕活動などにより、地域との関わりも深く、このことが復旧・復興活動にも良い効果をもたらしていることも明らかとなった。

以下、団体活動と時期の明確な区分は不可能であるが、震災直後とそれ以降における活動の内容を述べてみる。（詳細な団体毎の活動内容等は別表）

ア　青少年団体等の活動

(7) 初動対応期（震災直後）

混乱期であり、本格的な活動はできなかったが、出来る場所から、できることから活動が開始された。

○緊急相談所、救援センターの立ち上げ

○災害対策本部の設置
○ボランティアテントの設置
○会員の安否確認、情報収集
○政府代表団の避難先確保

(ｲ) 復旧・復興期（避難所～仮設住宅期）

震災直後は、団体の事務所、団体の会員等も大きな被害を受けたことにより、連絡もままならず、本来の活動はおろか青少年を含む被災者の本格的な支援活動が出来ない状況であったが、事務所の整理や連絡網の正常化に伴い徐々にそれぞれの特徴を生かした活動が開始されるようになってきた。

○募金、義援金の募集活動
○各避難所や仮設住宅における救援活動
・救援物資のとりまとめ、配給
・被災児童の心のケア
・仮設住宅訪問による相談
・避難所の運営（神戸高校）
・子どもサッカー教室の開催
・炊き出し
・保育サービス
・アルコール依存者ケア
○支援センターの立ち上げ（巡回、風呂、情報提供、炊き出し）
○独居家庭、独居老人訪問
○入浴、水汲み
○老人や子供達の話し相手

これはアンケート調査による一例であり、各団体ともその特色を生かした活動を実践していた。

ここにおけるテーマは青少年や青少年関係団体からみた検証ということであるので、次に青少年に限定した活動内容をみてみたい。

イ　青少年に関する活動

青少年に対する支援は実に多くの団体において様々な観点から活動されており、全てを紹介するのは困難であるので、ここでは特徴的な活動をされている団体の例を述べさせていただく。

(ｱ) 一時保育活動（家庭養護促進協会）

家の被災により、荷物の運び出しや整理する間だけでも子どもを預かって欲しいという要望や避難所で幼児が生活するのは無理があるなどの声に応え、短期的、一時的に子どものお世話をする里親を募集、斡旋した。

(ｲ) 震災遺児の支援（あしなが育英会）

震災遺児は他の交通遺児と違い、家や家財を同時に失ってしまったケースがほとんどであったことから、震災遺児に対する特別優遇制度である「阪神大震災遺児への奨学金特別措置」を決定するとともに、その活用を図るために育英会のＯＢとともに震災遺児探しのローラー作戦を行った。

また、震災遺児は他の遺児と比べあまりにも悲惨な肉親との別れを体験し、心の傷も深くこれまで以上の心のケアが必要との観点から、遺児達が気軽に立ち寄り、話をしたり、遊んだり、勉強したりできるケアセンター機能を備えた「レインボーハウス（虹の家）」を計画、建設した。

（詳細は後述）

(ｳ) 出張保育（西神戸ＹＭＣＡ保育園）

自らの保育園も半壊でライフラインが不自由であったにもかかわらず、保育ボラン

ティアや心のケアボランティアを募集し、避難所における子どもたちの遊び場不足等からくるストレスを解消するため、出張保育を実施した。

(ｴ) 臨時保育室の設置（神戸市私立保育園連盟）

被災後まもなく、神戸市私保連の「阪神大震災対策本部」を設置するとともに、各保育園と市福祉事務所が連携しながら仮設住宅の設置による保育園児の移動に対応するため、可能な限り保育定員を臨時的に増加させ保育にあたった。

(ｵ) おもちゃステーション（兵庫県子ども会連合会）

家を失った子ども達は、学校、公民館、公園などの避難所で暮らすことを余儀なくされたが、これは同時に子どもの遊び場も奪われた。このため少しでも子どもの気持ちを癒し、子どもらしい暮らしに役立てるため、おもちゃステーションを設置し、各避難所等に配給した。

(ｶ) ふるさとホームステイ（兵庫県子ども会連合会）

被災により、遊び場やライフラインが途絶え、平安な日常生活がおくれなくなった子どもに、ゆっくりと風呂につかり、暖かい布団で就寝してもらう取り組みであり、ホームステイの経費は全て受入先で負担頂いた事業である。

（「阪神大震災問われた大人の力ー大災害下のこどもたちより」抜粋）

ウ　新たな取り組み

(ｱ) 民間団体における新たな取り組み

震災からの復旧・復興にあたっては、各団体とも状況に応じた活動を展開してきたが、ここでは震災によってどのように新たな活動につながっていったかを調査の結果をもとにまとめたい。

ａ　神戸真生塾ロータリー子どもの家

この施設は世界各地のロータリークラブからの義援金をもとに、平成７年秋に建設された施設である。建設後から翌年の４月までは子どもの一時保育に取り組み、6月からは六甲アイランドの仮設住宅で暮らしている親子を対象に「もみの木ひろば」という訪問活動が行われた。この施設は震災後に新たに計画されたものであり、新たな活動の例として注目を浴びた。

このもみの木広場は、多くのボランティアが参加し、保育の中に自由な遊びや絵画、工作を取り入れるとともに、デイキャンプやハイキングなども企画し親子のケアに取り組んだ。このひろば活動は仮設住宅の閉鎖後も続けられていた。

一方で、ロータリー子どもの家活動は、単に子ども達の復興支援にとどまらず、地域の子どもを対象にした木工教室や手芸クラブ、野外活動や子育て支援、こころのケアプログラムなど、その活動が広がっていった。

このように、この団体の活動は被災した子どもの支援から、地域福祉活動の拠点として、多くのボランティアや専門家を巻き込んで福祉サービスを展開してきている。

ｂ　あしなが育英会レインボーハウス

先程も触れたが、あしなが育英会により建設された「レインボーハウス（虹の家）」は、震災で親を亡くした573人もの遺児の傷ついた心を癒す家として、複雑な感情を持つ子ども達がそれを表現できるよう特別な設計のもとに1999年1月に建設された施設である。

震災前までは考えられなかった施設であるが、アメリカのダギーセンター（※）をモデルとして、この震災を契機に全国でも初の施設として整備されたものであり、これも子どもの家と同様に新たな活動の代表的な例であろう。

この施設においては、職員も24時間体制で勤務しており、継続的、日常的な対応が可能となっている。

また、この施設は地域とのつながりも深く、施設内にある草花への水やりのほか、

心のプログラム（ケアボランティア）の手伝いも地元の主婦などがボランティアとして活動している。

勿論、ケアボランティアについては、専門的な知識も必要とすることから、年 1 回の講習を受けてもらった後に手伝いをお願いしている。このような、地域にとけ込んだ施設運営は新しいコミュニティづくりにも一役買うものではないであろうか。

※「ダギーセンター」とは、家族を亡くした子どもたちの心のケアセンターとして、1982 年にアメリカのオレゴン州ポートランドに建設された、世界で最も歴史と実績のある施設として評価されている。この施設は非営利、無宗派の民間団体であり、レインボーハウスのスタッフもここで研修を受け、癒しのスキルを学んだ。

c　社会福祉法人のぞみ会浜風の家

これも前述の施設と同様に、震災後に新たに設立された施設である。

震災の遺児や孤児､被災児の被災者のための心のケアを目的に平成 11 年 1 月にオープンした。この施設がレインボーハウスと異なる点は、ケア対象が被災遺児に限らず、広く児童館としての機能も有している点である。

この施設においても様々なイベントが開催されているとともに､平成 14 年度からは完全週休二日制に合わせて、第一土曜日に「いきいき遊び塾」を実施し、子ども達に仲間とともに遊ぶ楽しさ、自分で創る楽しさを体験する場を提供している。

また、イベントや日常活動の開催においては、地域からのボランティアを募集しており、ここにおいても地域と一体となった活動が行われている。

d　阪神大震災子どもケアネットワーク事業

この事業は毎日新聞社が中心となり子ども達の心のケアを図るために設置された「阪神大震災子ども救援委員会」により、子ども救援募金を募集し、高校や大学進学者の奨学金制度を創設するとともに、被災児童の心のケアに焦点をあてた事業を展開した。

この事業の実施にあたっては､(財）兵庫県青少年本部、養父町、大阪府青少年活動財団、大阪府子ども家庭センター、くもん子ども研究所、大阪府青少年補導協会の協力をいただいた。

○ケア施設「希望王国」の建設

震災で疲れた子ども達にリフレッシュする機会と豊かな体験を提供するため、養父郡養父町（現養父市）に 8 棟のバンガロー、いろりの家 1 棟、農園などを整備した。

○ユースサポート隊の養成・活動

被災した子ども達を支え、何でも相談できるお兄さんお姉さん的な役割を期待して設立され、仮設住宅の訪問や様々なイベント開催により被災児童の悩みを聞き、話し相手として活動した。

○被災児童の意識調査の実施

1996 年から 3 年間にわたって被災児童の心の動きの調査を実施するとともに、ノースリッジ地震の被災者にもアンケート調査を行い、阪神・淡路大震災の被災児との比較を行った。

e　新たな団体事業の展開

次に、震災前後で団体の組織体制に変化はないが、震災を教訓として新たな事業に取り組む団体もでてきた。

○研修メニューへの反映（避難所運営、ボランティアセンターの立ち上げ、救急法など）

○高齢者、親子支援プログラムの開発、実施

○配食サービス、ミニデイサービス

○テレホンサービス

以上は、青少年団体に対するアンケート調査結果による一部の取り組み例となっていることをご了解いただきたい。

(ｲ) 行政における新たな取り組み

これまで、民間団体等における取り組みについてみてきたが、行政においても震災を契機に新たな青少年施策が展開されている。

この施策の中には、震災後に新たに取り組んだものの他、震災前から取り組んできた施策を被災青少年への支援という観点から拡充したものがある。

それぞれの特徴は以下にのべるが、このたびの大震災が行政施策にも少なからず影響を与えた。

青少年施策については、子ども達が健全に成長していくためには、情報化の進展や少子高齢化、都市化という社会情勢の中で、人間関係の希薄化、コミュニティの崩壊をはじめとした青少年を取り巻く社会環境を見直す必要があるという観点から、震災前から異世代交流や社会参加の促進、青少年相互のコミュニケーションの促進に関する施策を企画、実施してきた。

今回の震災により、人と人、人と家庭、人と地域のつながりが青少年の健全育成はもとより、災害などの緊急時には復旧・復興に大きな役割を果たすことが再認識される結果となった。

主な青少年施策は次のとおりである。

a　ひょうごっ子きょうだいづくり事業

小・中学生を中心とした青少年の異年齢交流、異世代交流による地域活動を促進し、思いやりのあるこころ豊かな青少年を育成していくとともに、青少年活動を核とした地域社会の活性化を図ろうとする事業である。

この事業は昭和 63 年から現在も継続して実施中の事業であり、述べ事業数は、9,212 事業である。

b　仮設住宅地域スポーツ遊具設置事業

仮設住宅地域で生活する青少年が遊びやスポーツを通じて、気楽に楽しみながら震災で疲れた心と体のリフレッシュを図り、異年齢、異世代間の交流を図っていくため、スポーツ遊具を設置する事業である。

この事業は、平成 8 年度の単年度事業であり、遊具の設置数は 262 件である。

c　ウィークエンド・子どもいきいき体験事業

学校の完全週休二日制の本格実施に合わせて、子ども達の地域における多彩な体験活動を促進する。

この事業は、平成 14 年度と 15 年度の 2 ヵ年事業であり、述べ事業数は、170 事業である。

d　子どもの冒険ひろばパイロット事業

子ども達が遊びなどを通じて生きる力を育んでいけるよう、旺盛な好奇心やエネルギーを発散させ、のびのびと生きていく力を養う場を設定する事業である。(主に小・中学生)

この事業は平成 15 年度からのモデル事業であり、今後市町や地域の意向を踏まえながら実施方法を検討していく予定である。

開設目標数は出前広場も含め 120 か所である。

e　若者ゆうゆう広場事業

若者が学校や家庭以外で、気軽に立ち寄り、集まった仲間とおしゃべりや音楽、スポーツなどを自由に行いながら楽しく交流できる場を設定する事業である。(主に中・高生)

この事業も平成 15 年度からのモデル事業であり、冒険ひろばと同じく、今後市町や地域の意向を踏まえながら実施方法を検討していく予定である。開設数は 20 か所

である。

f　トライやる・ウィーク

震災や児童殺傷事件を踏まえ、心の教育の充実を図ることにより、児童生徒一人ひとりが自分の生き方を見つけるよう支援するため、体験を通して子どもが自ら体得する場や機会を提供する事業である。

全県の公立中学校の2年生を対象に平成10年度から実施しており、現在も継続中である。

平成15年度の実施校数は、356校（公立300校、市立養護学校5校）、平成10年度から15年度までの参加生徒数は、322,391人

g　「ひょうごの匠」キャラバン隊派遣事業

若者のものづくり離れに対処するとともに、技能のすばらしさ、楽しさ、難しさを体験することにより、青少年に対する技能の伝承及び技能尊重気運を醸成していくため、県が認定した技能者を県内の中学校に派遣する事業である。

平成15年度の派遣校数は20校、参加生徒数は3,314人

平成10年度から15年度末の実績は、派遣学校数92校、参加生徒数は14,173人

エ　青少年団体等の初動対応期の活動に関する課題

青少年団体等が被災した青少年に行ってきた様々な支援活動については、先に紹介したが、ここでは、震災時における団体や行政の混乱などにより、本来は速やかに実施したかったが出来なかったこと、あるいはすべきであったことについて述べてみる。

(ｱ) 出来なかったこと

a　震災直後の被災状況の把握

団体機能がマヒした中で、地域組織の集合体である団体は、状況を把握し団体としての取り組みを展開すべきであったができなかった。

b　被災地外や他の活動団体への情報提供

被災地外からの救援申し出に対して、前述の状況により具体的な提案ができなかった。また、他の団体とのネットワークも無いことから、同じような救援活動を行っている団体やボランティアグループ相互の活動内容などに関する情報交換ができなかった。

c　迅速な遺児探し

保護なり支援を必要とする遺児を探す場合、行政や教育委員会に情報提供を求めたが、遺児の居所を教えてもらえず、多大な時間をかけて自前でチームを編成して捜索することとなった。

d　救援物資の配給アンバランス

避難している青少年（児童を含む。）にその時必要なものを配給したかったが、救援物資が避難所毎に偏ってしまった傾向がみられ、必要な物が搬入されない状況が生じていた。

e　子どもの心のケア

子ども一人ひとりに対するケアや子どもが避難所等で活動するための呼びかけやメニューの提供ができなかった。

(ｲ) 原因

a、b　緊急対応に不慣れであったこと、事実上連絡が出来る状況でなかったことはもとより、緊急時対応について意識や行動についての訓練が出来ていなかったためと考えられる。

このため、緊急時のマニュアル作成のみでなく、震災の状況を広く内外に情報提供し、日頃から対応できるような仕組みづくりを構築しておく必要がある。

c　迅速な遺児探しができなかったのは、学校や行政が法令に基づく守秘義務が課されていたためであった。現行制度上やむを得ないことではあるが、緊急時には相手

を確認した上で情報を提供することも検討すべき課題である。

d　救援物資が物資の種類を含め、偏ってしまった原因は、まず、マスコミの取材、報道の影響があげられる。当然のことながら、テレビ等で大きく取りあげられた施設や避難所には日毎に多くの救援物資が運び込まれたが、そうでない市町や施設には必要量が搬入されないこととなった。

また、物資を一括管理、一括保管する機能が十分ではなかったことも一因としてあげられる。

e　地域割りの救援活動や対象者別救援活動等を視野に入れ、日常的につながりのある団体相互の連携がなかったこと。

オ　青少年団体等の地域との関わり

震災からの復旧・復興に関する活動に限らず、青少年団体等は従来から地域と一体となって活動してきた例が多く見受けられた。

一部の支援団体に関しては、震災後における施設の建設や日頃の活動について周辺地域から反対なり苦情も見られたが、今では地域と一緒になったイベントを開催するなど、地域との一体感が醸成されつつある。

これまで、小・中・高等学校や児童生徒たちの震災後の活動について検証してきたが、やはり地域との関わりが活動の迅速さや成否に大きな影響を与えていることがわかった。

青少年関係団体と地域との関わりについても同様であり、施設が地域から独立して存在することはあり得ないことも明らかとなった。

地域の理解と協力が得られないことは、団体の活動を大きく左右することにもなるのではないだろうか。

特に青少年関係団体の活動は地域を基盤とする活動であること、青少年を育成していくのは、地域社会であることからも、その関係は切っても切れないものである。

こういった意味で、家庭、地域、学校が地域社会と一体となってそれぞれの持つ大切な機能を果たしていることも明らかである。

つまり、青少年団体の活動と地域とは密接な関係を有しているものであり、地域とのつながり無くしては青少年活動はあり得ないと言っても過言ではないと考える。

地域イベントの合同開催や協力をしていくことは、青少年に社会参加の機会を与え地域の一員として地域における青少年の居場所をつくることにつながり、青少年が自分の存在を再認識することにもつながっていくのではないだろうか。

震災からの復旧・復興に関しても、多くの団体が炊き出しや物資の配給、などについて、地元の団体とも協力しながら行っており、これが青少年関係団体への更なる理解と一体感の醸成に役立ったことも事実である。

いずれにしても、青少年関係団体と地域とは、青少年を育成していくためにも、緊急時の対応においても密接な関わりがあることは明らかである。

カ　教訓の情報発信

震災から、10 年目を迎えようとしている今、多くの団体がこれまでの青少年関係団体の貴重な経験を広く国内外に、あるいは関係団体に伝えていく必要性を感じていることが今回の調査でも明らかになった。

団体により、情報発信の手法や範囲は異なるが、ここでいくつかの例を紹介しておきたい。

○研修メニューを開発し団体ネットで全国に発信する。
○10 周年を契機に再度検証する機会を設定する。
○活動の大きな柱であるキャンプを通じて子ども達に経験を伝える。
○地域や職域で開催される講演会等で教訓を伝える。
○情報誌、震災記念冊子の発行など

これは、ヒアリング等による一例であるが、各団体とも先にも述べたが団体の活動そ

のものの中に防災訓練や新たなメニューによる活動に取り入れるなど、震災を風化させず未来に伝えていくことに努めている。

次に、前に震災により親や兄弟を亡くした被災者の話を取りあげたが、震災はこのような方の人生に大きな影響を及ぼしたということは、承知のことである。

検証でヒアリングをした結果においては、家族や学校との葛藤を経て、新たな人生を歩むことになった者が少なくない。

自らの経験を踏まえてNPO法人に加入し、この法人で震災の教訓を伝えていく業務に専念している被災青少年もいる。

同じく震災の経験を生かすべくボランティア関係の職業を転々とし、今ではある県立学校の教壇に就き、震災の経験や教訓を学校の場から伝えていく、情報発信していこうとしている被災青少年もいる。

このように、既に色々な団体で、また被災者自身が震災の教訓を広く伝えようという活動が展開されている。

【震災を知らない人口が神戸で 25%と言われているが、震災を経験してない子が小学校三年生になってたり、他の所から引っ越してきたりして、知らない人がこれからもっと増えると思われる。その中で、語り部として何を伝えていきたいと思うか】

ひまわりの種を配ることによって、震災のことを伝えているし、神戸に来れない人のためには、種を持って私が動くこともできるので、ひまわりは移動できるモニュメントだと思う。

これから先、自分の経験を話すことと、震災で六千何百人という方が亡くなったが、その方にも家族があって、夢があって、亡くなられた方一人ひとりの人生を見ていただきたい。

神戸の場合沢山の人が亡くなったので、一人ひとりが取り上げられる機会が少ないですよね。命ということ、小学生の事件、理解できないことか起こっているが、その事も伝えていきたいなと思う。

人に話すことで、私自身も忘れている記憶を思い出す。自分に忘れさせないことも大事ですね。広島の戦争体験を語られる方も今は、高齢になられてますけど、小さい時に体験したことだから、忘れずに語れるので、震災の語り部に若い人がいてもいいなと思って、始めた。若い人が若い人に語る方が身に付きやすいし、考えやすい。自分に置き換えやすいと思う。

当時の中学生からのヒアリング（抜粋）

4　10カ年の総括評価

今回の検証では、震災当時に小・中・高校の学生であった方、当時に学校で大変な苦労をされた小・中・高校の教師の方々、青少年団体や青少年の支援団体など、各方面の多岐にわたるヒアリングやアンケート調査を行ってきた。

与えられた時間の都合もあり、ほんの一部の方々からの調査とならざるを得なかったことも事実であるが、基本的な方向は見い出せたのではないかと思っている。

これまで、震災による青少年の心の変化、震災を経験した事による自身の将来への影響、青少年関係団体等の活動や震災に伴う団体活動の変化、さらには支援施設の建設などの全国にも例を見ない新たな取り組みや地域とのつながり、学校や学校教育とボランティア活動、学校と地域とのつながりなどについて述べてきた。

今度の検証では、平常時においても、緊急時においても結局は、人間（青少年）として社会（地域）の一員として、さらには家族の一員として、そのどの場面においてもきちんと青少年が自分の存在を実感できることが重要ではないかと考えるに至った。

通常の学校生活を送っていた生徒が緊急時に「自分に何ができるか」を考えて臨機応変に動いたこと。学校生活に馴染めずに不登校となっていた生徒が、震災を機に学校でのボランティア活動に参加し始めたこと。そして子ども達が自分の将来についても新たな方向を見出したことなど、今回の検証を通じて子ども達のたくましい生き方を改めて評価することとなった。

私たちが社会生活を営んでいくためには、様々な個性を持つ人間の中で自分の居場所をしっかりと見つけ出し、その役割をしっかりと果たしていく必要がある。

特に、青少年の立場からみると、家庭や徐々に社会参加していくための入り口でもある周辺地域との関係、続いて学校や友達との関係など、青少年の育成には無くてはならない関係が重層的に構築されている。こういった各段階で青少年が自身の位置づけや役割を明確に認識できることが、社会参加の第一歩と言えるのではないか。

また、学校や青少年団体においても、この震災を契機として地域を巻き込んだ取り組みを展開することの重要性を再認識することとなった。

学校という施設を避難者と共同利用することが、結果として学校を地域に開き、地域における役割を強めたとも言えるのではないか。

さらに、青少年を支える団体は支援施設の建設、運営を通じて、地域の人々からボランティアとしての協力を得るなど地域との関わりを深めていった。

しかし、子ども達の主体的な活動や日頃からの学校と地域、青少年団体と地域との関わりが復興に大きな効果を上げたこと、青少年団体における日頃の活動が震災時に役立ったこと、各団体においてもこれまでにない新たな取り組みが開始された反面、地域コミュニティの状況によっては、すべきことが出来なかったことを指摘しておきたい。

つまり、個人と個人、個人と家庭、地域、学校、団体等とのつながりの重要性を認識し、緊急時にも平常時にもそれぞれが「協働」して取り組める体制づくりを進めることが、今求められていると考える。

5　今後の取り組み方向

(1) 青少年の健康な成長に向けた取り組み

ここから、いよいよ提言に入るが、震災で青少年のひきこもりや不登校生がボランティア活動をきっかけに自分の存在意義が見いだせたことにより、ひきこもり等から立ち直ったばかりか、新たな生きがいを見つけ出し、現在も社会の一員として生き生きと活動していることを紹介した。

また、たまたま救援物資を配ったときに被災者からかけられた「ありがとう」の一言で自分の役割と存在価値が認められたことにより、学校になじめなかった生徒が地域の中に自分の居場所を見つけることとなり、社会人として自立して生活していくことが出来るようになった。

震災をきっかけとした活動がひきこもり生徒など自分の存在や人生に大きな疑問を抱き悩んでいる青少年を救ったばかりか、社会にとっても重要なパートナーとして活躍することにつながったという事実を踏まえれば、緊急時における活動促進が青少年の健全育成にもつながっていくということに着目せざるを得ない。

ここで改めて先程の行政施策に触れてみると、健全育成を図るべく、青少年相互の触れあいの場づくり、地域と青少年の触れあいの機会づくり、あるいは、地域が親やお兄さん、お姉さん代わりとなり気軽に声を掛け合う事業などモデル的に実施しているが、このような取り組みは悩みを気軽に打ち明けられる環境づくり、地域との一体感、自分の存在価値の発見などにつながる。

こういった事業は、全県的な展開が必要であるが、県としてすべき範囲と市町やNPOなどの団体がすべき事柄をしっかりと整理し、県内にスムーズに広げていくための役割分担について、今後議論していく必要がある。

ここでは、青少年が自らの居場所を見つけ出し、その役割を果たしていくことを支援するための取り組みについて提案したい。

ア　青少年の心の問題への対応

(ｱ) 悩みを真剣に聞いてくれる相談の充実

子ども達は悩みや現状を聞いてくれる身近な大人を求めている。

何も意見を言って欲しいわけではなく、むしろ黙って話を聞いてくれ、あるがままを認め、時には褒めて欲しいと望んでいる。そのためには、地域の大人が普段からあいさつや声かけを通じて人間関係をつくり、相談相手、よい聴き手となることも効果的である。

必ずしも専門的な知識を要するわけではないので、子どもの悩みと真剣に向かい合う意欲のある人材と気軽に立ち寄って相談できる場所を確保する。

(ｲ) 同じ境遇におかれた者が本音で話せる機会の確保

レインボーハウスの例をみてもつらい体験をした者がお互いの心情を打ち明け、思いを共有することが立ち直りのきっかけとなることがある。そのため、被災で兄弟姉妹を失った者やひきこもりを経験した者など同じ境遇にある者同士がうち解けて本音で話ができるような場を設定する。

(ｳ) 地域で大人との出会いの場をつくる

子ども達の社会体験の場が少なくなっていることが課題となっているが、遊びや自然体験、物づくりなどにおいて子ども達に関わってもらえる人たちを身近なところで発掘していく必要がある。

地域には様々な技術や知識を有した人が存在するので、日頃からあいさつや声かけを促進していくためにも、こういった専門家が子ども達に色々な技を教える機会を設ける。

イ　青少年の体験活動の充実

(ｱ) 子ども達が自由に遊べる場所の拡大

震災の時、子ども達の笑顔や「元気」が大人たちを和ませ、ボランティア活動が復興の大きな力になったことは前に述べた。

しかし、避難所をはじめとして、被災地において子ども達が自由に遊べる場所が不足していたことも事実である。

浜風の家でも当初は座布団を使った「赤ちゃんごっこ」や「お家ごっこ」など、自分たちで心を癒す遊びが見られた。

県でモデル事業として実施している「子ども冒険ひろば」をより身近な単位で開設していくなどの取り組みが必要である。

また、これと同時に子ども達を遊び場に誘う中高生や大学生年代の遊びのリーダーを養成していくことも大切である。

(ｲ) トライやる活動の拡大

教育委員会において中学２年生を対象とした「トライやる・ウィーク」が実施されているが、このような社会体験活動を一過性のものにとどめることなく、地域住民の参画と協働のもと、全ての子ども達が参加できる活動へと拡充していく必要がある。

(ｳ) 家族同士の体験交流

社会生活において、それぞれの家のルールやマナーを習得させるために、身近なところで数家族が共同生活を行ったり、友人の家に泊まりにいく機会を創出する。

(ｴ) 野外活動機会の拡大

キャンプなどの野外活動は、住む、食べる、着る、楽しみなど、子ども達が社会生活の基本技術を身につけたり、仲間と協力する場面が多くある。このため、あまり決められたプログラムで展開するのではなく、子ども達が主体的に野外活動を体験できる機会をつくる。

ウ　青少年の居場所づくりの推進

(ｱ) 若者が気軽に立ち寄り交流できる場の拡大

被災青少年の心のケアにおいては、本音で話ができる友人や大人の聴き手が存在することが大切であることがわかった。

県でモデル事業として実施している「若者ゆうゆう広場」をより身近な単位で開設していくなどの取り組みが必要である。

(2) 地域コミュニティの機能強化に向けた取り組み

青少年が地域の中で自分の居場所を見つけ、地域コミュニティの一員としての自覚のもと、生き生きと生活することは重要な意味を持っている。

従来からコミュニティの機能が高い地域では、震災発生時には早期の安否確認を可能としたほか、地域住民の詳細な情報を共有していることから、被災者の助け出しや相互支援に大きな威力を発揮したことも先に述べたとおりである。

こういう意味からすれば、緊急時における対応の迅速さからも、「地域づくりは最大の防災である。」とも言える。

昔から「向こう三軒両隣」という近所付き合いの基本とも言える言葉があるが、これは近所に住む人間や家族の状況を最低限に知っておき、共同体意識を培い、日頃のお付き合いはもとより、緊急時や防犯についてお互いに助け合っていこうというものであり、最小のコミュニティあるいはコミュニティの基本であるとも言える。

しかし、都市部における多くの住民、特に新興住宅地やマンションなどの共同住宅においては、たまたま子ども同士の遊びなどがきっかけで付き合うようになった家族は別として、隣にどんな家族が住んでいて、どんな家族構成なのかを知らないことが珍しくない。

このような状況におかれている青少年は、大人の付き合いに影響を受け、普段から近所や地域の人と触れあい、話をする機会が奪われてしまっているのではないだろうか。

また、青少年関係団体も普段から様々な機会を通じて、地域の方々と付き合い、顔と顔の見える触れあいを続けていくことが重要ではないだろうか。つまり、普段、日常の暮らしの中で、どんな活動や付き合いがなされているかが、緊急時の対応にも大きな影響を与えることとなる。

団体の活動においても、これまで以上に地域の方々が参画できるようなメニューづくりを行い、地域に根ざした施設となるような環境を作り出すことが大切である。

そこで、青少年や青少年団体の視点から、地域コミュニティの機能強化に向けた取り組みについて、いくつかの提案をしていきたい。

ア　青少年の地域活動への参加促進

(ｱ) 地域事業のモデルチェンジ（子どもの視点の導入、子どもの参画）

昔の子ども達は異年齢集団として、年長の者がいわゆるガキ大将となって活動をリードしてきた。そこで「子どもの冒険ひろば」などを活用し、小学校高学年や中学生が中心となった活動を支援することが必要ではないかと考える。

このため、子どもを地域の一員として捉え、豊かな発想を地域事業の企画に生かす機会を与えることにより、地域の担い手としての認識を深める。

具体的には、子ども会、PTA などの青少年関連団体や青少年が主役となって、祭り、フリーマーケットなど、地域と解け合うことができるイベントを企画、運営する。

また、事業のメニューを限定することなく、子ども達の自主的なアイディアを尊重し、支援する事業を企画することも重要である。

更に、農園クラブやクラフトクラブなど、子ども達が関心を持つ分野について、気軽に参加できる機会を設定するとともに、子どもの遊び環境づくりなどの地域活動に取り組んでいる団体が課題を共有しあいながら、連携やネットワーク化を図り、一体となった地域づくりを進めていくことも大切である。

(ｲ) 年齢に応じたリーダーの役割

ボーイスカウトでは、年長の子ども達がその下の子ども達を世話しながら成長していく仕組みができている。子ども達はその年齢に応じたリーダーの役割を果たすことが出来るのではないか。小中学校でリーダーとして活躍した子ども達は成長した後も「子どもの冒険ひろば」のプレイリーダーや若者の相談相手として活動するなど、継続的に地域コミュニティでの役割を果たしてくれるものと期待したい。

(ｳ) 地域防災コミュニティへの若い世代の参加

現在、各地で地域防災コミュニティとして集会や研修が実施されているが、ここに集まって来るのは主に子ども達や 40 代以上の年代に偏っており、10 代後半の世代や 20 代、30 代が参加できるような仕組みづくりが必要である。若い世代が自らの震災体験を子ども達に伝えていくことも有益であるし、得意分野であるニューメディアを活用すれば活躍の場も広がっていくのではないか。

イ　青少年を地域で支え合う仕組みづくり

(ｱ) 地域コーディネーターの配置

子どもと大人の関係が疎遠になっている現実や少子・高齢化時代に見合った地域づくりを進めていくため、地域コーディネーターを配置し、子ども会、福祉活動、学校や自治体とのコミュニケーションを図っていく。(既に地域づくりに取り組んでいる地域もある。)

この地域コーディネーターのもとに、子ども会などと協力して子ども達の遊びや仲間づくりを進めるプレイリーダーや福祉的な視点で地域活動を展開するソーシャルリーダー、地域住民が有する技術や知識を生かしたり、様々な団体との連携を図るジョイントリーダー、さらに青少年育成員、民生委員、福祉委員、行政や学校と一体となってイベント等を企画するプロジェクトリーダーを設置し、潤いやふれあいのあるまちづくりを進めていく。

(ｲ) 地域活動におけるシニア世代の活用

地域と一体となった取り組みを促進していくためには、自治会や婦人会などの地域団体にも子ども達との交流の場を提供する新たな催しを発案してもらうことが肝要である。

少子高齢化が進展する今日、年齢構成の重心がシニア世代に移行していることは明らかであり、このようなシニア世代が中心となって世代間交流も可能となる地域独自の催しを自ら実施、あるいは青少年関係団体に要請していくことも大切となってくる。

団塊の世代をはじめとして、今後とも増加するシニア世代が地域活動に参加できるような仕組みづくりが必要である。

(ｳ) 施設運営や団体の運営における地域協力体制の確立

青少年に関わる団体の活動はますます重要性を増すことから、団体等の運営についても出来る限り、地域からのボランティアを募集するなど、地域と一体となった組織運営に努めていく。

(ｴ) 青少年団体への支援強化

復旧・復興において、地域社会を基盤としている青少年団体は持ち味を生かした様々な活動を展開してきたが、この活動は地域とのつながりによって、より効果をあげることがわかった。このため、各団体が共通して取り組むための人材育成やプログラム開発を行う必要がある。

(ｵ) 子どもを家庭に受け入れる経験づくり

家庭養護促進協会が震災直後に被災児童の一時保育を行ったことは先に述べたが、被災者が保育を希望する時間帯や場所やニーズも様々であり、保育希望者と受入れ家庭との調整が必ずしもうまくできていなかったという事実もあった。

この経験から、身近な地域にいつでも子どもを短時間受け入れることのできる多くの家庭が存在することが、被災者の一時保育に対する多様なニーズにも応え、子ども

達の安全や生活が守られると思われる。

出来れば小学校区に一家庭の「里親」のような子どもを受け入れる家庭があれば、子どもは自分の生活圏から離れずに暮らすことができると思われる。日頃から生活圏の中でお互いに子どもを預け合ったり、助け合ったりする顔のつながりが持てるような付き合いをしておくことが、非常時に大いに助けになることは、明らかである。

また、ボランティア里親（児童養護施設で暮らす子ども達を週末や夏休み、冬休みなどに家庭に受け入れるボランティアの里親）の経験を積むことによって、非常時に被災者に家庭を開き、地域の子どもを受け入れる下地がつくられるもとになっていくだろう。

今後ますます進展するであろう少子高齢社会を考えれば、子育て経験のあるシニア世代がこのようなボランティアの里親として子育て支援の役割も担うことができると思われる。

(3) ヒアリングにおけるその他の個別提案

提案の方向性については、前述のとおりであるが、今回のヒアリング等において、具体的に提案された事項について、ここで紹介しておく。

ア　学校施設の改修

災害時には学校が避難所となることから、これに備えた各種設備を整備しておく必要がある。

具体例としては、エレベーター、スロープの設置、緊急時には避難部屋としても活用できる毛布等収納部屋、プライバシーを確保するための簡単な仕切板

イ　身近な者から教訓を伝えていく

無理をして様々な会合等で震災の教訓を伝えていくのではなく、本当に身近な者から徐々に伝えていくことが大切。

ウ　コンパクトな防災ハンドブック

行政で膨大な量のハンドブックを作成しているが、いざというときに役に立たないので、もっと現場で使いやすいようなコンパクトなハンドブックを作成すべき。

6　おわりに

震災直後から復旧・復興過程において、青少年は何を感じ、考え、どう行動したのかを彼等の視点から検証するために、当時小学生や中学生、高校生であった多くの人たちや教師、団体指導者からアンケート調査や聞き取り調査を行った。

彼等の取り組みが避難所での運営に新たな動きを生み出したことや被災者の癒しにつながるなど、効果的に展開されていたとの報告が少なくなかった。

また、震災が自身の進路や職業選択、そして生き方や価値観等にも影響を受けた青少年が少なくないことが確認できた。

聞き取りを行った人たちは、震災の経験から「保育士」、「消防士」、「救急救命士」や「教師」といった職業を選択し、「人を助ける仕事をしたい」あるいは「人の役にたつことをしたい」という強い思いを持った人たちも少なからずいたことがわかった。

多くの作文集や文献、調査からも青少年の進路や職業の選択に震災が様々な影響を与えたことが推測できる。

また、進路や職業選択には直接影響を受けてはいないが、「人の役に立つ生き方をしようと思う」、「多くの国や地域で災害が起こると自分も何かできないかと考え、義援金や物資を送るようになった」、「亡くなった友達の分までしっかり生きなければ、という気持ちでいる」、「人は助け合って生きなければいけない。自分の出来ることを何かするように心がけている」など、内面の変化は多くの青少年にみられた。

青少年の震災体験は、必ずしも形や目に見えるものだけでなく、内面化してこれからの人生や彼らの生き方、価値観を形成していく中で活かされてくるのであろう。

しかし一方、数は少ないが、未だに震災の傷を背負ったまま家に引きこもったり、立ち上がれずにいる青少年がいることも忘れてはならない。

彼らにとっては、震災は今も続いているのであり、こうした青少年に対しても、引き続き細やかな心配りや支援を怠ってはならない。

今回は、10 周年という一つの区切りで検証を行ったが、これで終わるものではない。人間の成長にあたって震災が青少年に何を与えたか、これからも長い時間をかけて見つめていく必要がある。

この検証作業の最中に、兵庫県でも度重なる台風の襲来により大きな被害が発生した。被災地においては、復興に懸命に取り組む大人の姿に学んだのか、ボランティア活動をはじめ多くの中・高生が自主的に活動する姿が見受けられた。

また、日本ボーイスカウト兵庫連盟や兵庫県子ども会連合会など多くの青少年関係団体においても、いち早く被災地での支援や募金活動が展開された。この検証で明らかになった青少年や青少年団体が果たす役割の重要性は、地震に限らず全ての災害に通ずるものであることは言うまでもない。

最後になりましたが、今回の検証では、当時の生徒や教師の皆様、青少年関係団体の皆様に深いご理解とご協力をいただきました。心より感謝とお礼を申し上げます。

また、社団法人家庭養護促進協会事務局長の橋本明様には調査から執筆までご指導、ご協力いただきました。ありがとうございました。

この皆様のご好意を無駄にしないためにも、この検証が一人でも多くの方に伝わることを願っております。

【アンケート、ヒアリング調査ご協力者一覧】（50 音順）

個人	団体
赤松喜雄様	あしなが育英会神戸事務所
浅堀裕様	尼崎市子ども会連絡協議会
阿曽恭子様	家庭養護促進協会
伊藤道男様	ガールスカウト日本連盟兵庫支部
岩本しず子様	神戸市子ども家庭センター
裏井智恵様	神戸市少年団
岡本剛様	神戸市私立保育園連盟
加藤いつか様	神戸フットボールクラブ
川島淑子様	神戸 YMCA
黒川恭眞様	神戸 YWCA
古村光平様	日本青年会議所近畿地区兵庫ﾌﾞﾛｯｸ協議会
坂部恭子様	日本ボーイスカウト兵庫連盟
柴田光啓様	兵庫県子ども会連合会
大日千恵子様	兵庫県少林寺拳法連盟
武貞健治様	兵庫県スポーツ少年団
千歳歓様	兵庫県青少年赤十字協議会
坪井弘典様	兵庫県世界青年友の会
天王寺谷さち子様	兵庫県 BBS 連盟
仲澤一彦様	兵庫県ユース・ホステル協会
中杉隆夫様	野外活動協会（OAA）
中溝茂雄様	ライオンズファミリーホーム
拝原美奈子様	ロータリー子どもの家
橋本明様	
花輪志穂様	
藤原周三様	
藤原奈央子様	
牧田稔様	
牧野君代様	
森脇悠子様	
山添繁様	
脇田英明様	
県立舞子高校環境・防災科生徒 3 名	

別添「作文集」

（芦屋南高等学校「1．17」より）

”私の心に変化が生まれた”

1　新しい生き方に気がついた

『これからは「自分らしい生き方」をしていこうと思う。常に自分が何をしたいのか、と問いかけ、自分の信じる道を進んで行く。勉強のことも、ただ単にするのではなくて、「憧れのあの職業につくために大学に行くのだ」という目的を持ちながらしていく。もう今までの様な流されっぱなしの人生を送るのではなく、自分の納得いく人生を作りあげていきたい。』

『この地震で、五千人以上の人が亡くなり、それと同時に五千人以上もの人の夢が失われてしまいました。そう思うととてもつらくなります。けれど、この地震で、近所の人達と助け合ったり、水のありがたさに気づいたり、何も起こらなかったら気がつかなかった大切な心が見えてきたので、これを忘れることなく、これからの自分に生かしていきたいと思います。』

『着々と進む復興の裏側に、失われた景色があるのだという事を忘れずにいようと思います。失って初めて、今まで私がどれだけ多くのものを見過ごしてきたのかがわかりました。壊れてしまったものの、ほとんどの元の姿を、私は思い出すことができません。だから、これから創られていくものを一つでも多く､私自身の中に残しておきたいと思います｡そして、失ったものの中から生まれる新しいものは、それまでよりもずっと強いものになると信じています。私はそれらに期待します。』

『今までどれ程自分は水や食料はあって当たり前として扱っていたかと言う事だ｡しかし、これは今まで通りの生活をしていれば一生かかっても気付かなかっただろう。それらの尊さを初めて身にしみて感じた。』

『震災という極限の状況の中で、自らの弱い面ばかりが出て、自分自身がいかに無力な存在であるかを感じる事がよく有る。生きてきたのは自分自身の力によってではなく、私を取り巻く周囲の人に生かされて来たことを確認する。』

2　命があることに感謝したい

『人は人が救い、人は人に救われ、助け合って生きていくという事がどんなに大切であるかという事を改めて感じました。話もあまりしたことのない近所の人が「何か困ってることあったら言ってや。」と声をかけてくれ、普段では、見逃してしまっている人の温かさや思いやりも知りました。まだまだ、不自由な事が、身の回りにはたくさんあるけれど、助け合えることはお互い助け合い、復興に向けて頑張らなければいけません。不自由なく生活している時は、人のありがたさや、物のありがたさなどは、すっかり忘れてしまっているけれど、この災害を期に、「感謝する心」を忘れずに持ち続けたいです。』

『この地震で失ったものは大きいけれど、一瞬にして消えたたくさんの命を決して無駄にしてはいけないと思うし、いつまでも悲しんでいてはいけないと思う。また、当たり前のように使っていた水なども、今となってみれば重要だし、当たり前にできることに感謝しなければならないと思う。

私は、ボランティアを通して、人とのふれあいの大切さなどを感じた。そして、これからもいろいろと学んでいくけれど、その中で、私は、悔いの残らないよう、一日一日を大切に過ごしていきたいと思う。どこにいても、そう思う気持ちを忘れず、これからも頑張っていきたい。』

『地震から一ヶ月が経ち、町も徐々に活気が出て来た。今思えば、喜びと悲しみが一気に飛びかかってきて、長かったのか短かかったのかも分からない日々だった。電気がつき、部

屋がパッと明るくなって、みんな声をあげて拍手をしたこと、初めて食料が来て、話した事もない人々とも自然に一致団結してそれらを配り、分け合ったこと、受話器の向こうから聞いた「無事やった？」と言う友達の声、ボランティアの方々の助けと、「当たり前の事をやっているだけだ。」と彼等が言ってくれた時の感動、そして、仲間の死。本当に言葉で表せない程の出来事があった。その中で私は人間の素直さに触れ、協力し、励まし合う事の大切さ「生きている」と言う事がどんなに幸せかと言う事を学んだ。』

3　他人への思いやりを忘れない

『ほとんどの家が断水を余儀なくされて、困っている時に、「私の家は水がでますよ。」と言って、友人はもちろん、全く知らない人にまで大量に水を分けてくれた人がいた。正直いって感動し、そして驚いた。今までの僕なら、みんなの水がない時に、たまたま自分の家だけが水が出たら他人には分けないだろう。こっそり自分の水としてだけ使っていたと思う。

全てが揃った世の中で、食べたい物が食べられ、好き勝手な事をしたい放題の今までの生活からは芽生えなかった色々な事への感謝の気持ち、他人への思いやりなどが僕の中に育まれた気がする。』

『私は今回の地震で人の命の尊さと温かさを知った。世界中の人が物資を送ってくれたり、ボランティアに来てくれたり、とてもありがたいと思った。これからもし、世界で困った事が起こった時、私は小さな事でも協力したい。』

『非常に心苦しかったのだが、五日目に大阪にお風呂に入りに行った。歩いて西宮北口に着いた時、すでにリュックサックを背負った人々が大勢いて、電車を待っている人々の表情は同じであった。笑っていても、その裏には悲しさが感じられた。梅田に着いた途端、私はショックを受けた。女子高生が学校帰りに高級な化粧品を買っていて、若いカップルが仲良く歩いて、あちらこちらでバーゲンをしていて…。その光景は信じられないものであった。大阪と神戸。隣にあるにもかかわらず、何故これほど違うのだろうか。何故あれほど平気で笑えるのだろうか。しかし、私は梅田で見た彼らを責めない。私に責める資格はないのである。私が梅田で見た彼らの姿は地震前の私の姿そのものだからだ。奥尻島にしろ雲仙普賢岳にしろ、私はいつも他人事のように見ていた。「ふーん。大変だね。」と横になりながらおかきでも食べて見ていた。「かわいそうだね。」と言っても、本当に心からそう思っていたとは思えない。被災者の人々の苦労、悲しみなど何も分かっていなかった。』

4　ボランティアをやりたい

『高校生のボランティアを見ていると、なにもせずに今日も学校へ行っているだけの自分を、恥ずかしく思う。一日だけ、マンションのフロントでお手伝いをさせてもらった。プリントの仕分けやちょっとした受け付だった。自分では、おじゃましてるだけという感じだったが、“ありがとう、おつかれさま”と言われてうれしかった。なんだか自分もやったぞという満足感と自信がついた。今まで“ボランティア”と言えば、堅苦しい、難しいことかと思っていたけど、地震が起こってからは、もっと肩の力を抜いてできるんじゃないかと思った。“何かしてあげよう”よりも“何かしよう”という気持ちが大切だと思った。

この地震で人のいろんな所を見たと思う。ボランティアに精を出す人もいれば便乗値上げ等して金をもうける人。人の弱い面、強い面を見たと思う。そして、このようなパニックの中でどのようにいかに人と人とが支え合うか、考えもしたし、目の当たりにした。いい勉強になったと思う。若い人達のボランティアの姿を見て、いつもはミニスカートをはいていたりとチャラチャラしてるけど、やるときはやってくれるなーと思った。自分は地震前までボランティアらしきものなど経験したことがなかったけれど少しはボランティアというものがわかったのでこれを機会に積極的にやっていきたいと思った。』

５　亡くなった友達の分まで生きる

『あの子（亡くなったクラスの仲間）の分までがんばる。あの子の分までって簡単に言うけれどすごく難しいことで具体的に何をどうがんばるのかは、私もわからない。生きていくなかでだんだんわかってくるんだと思う。とにかく今のままの自分じゃなくて何事においても一生懸命やらなくてはいけない。

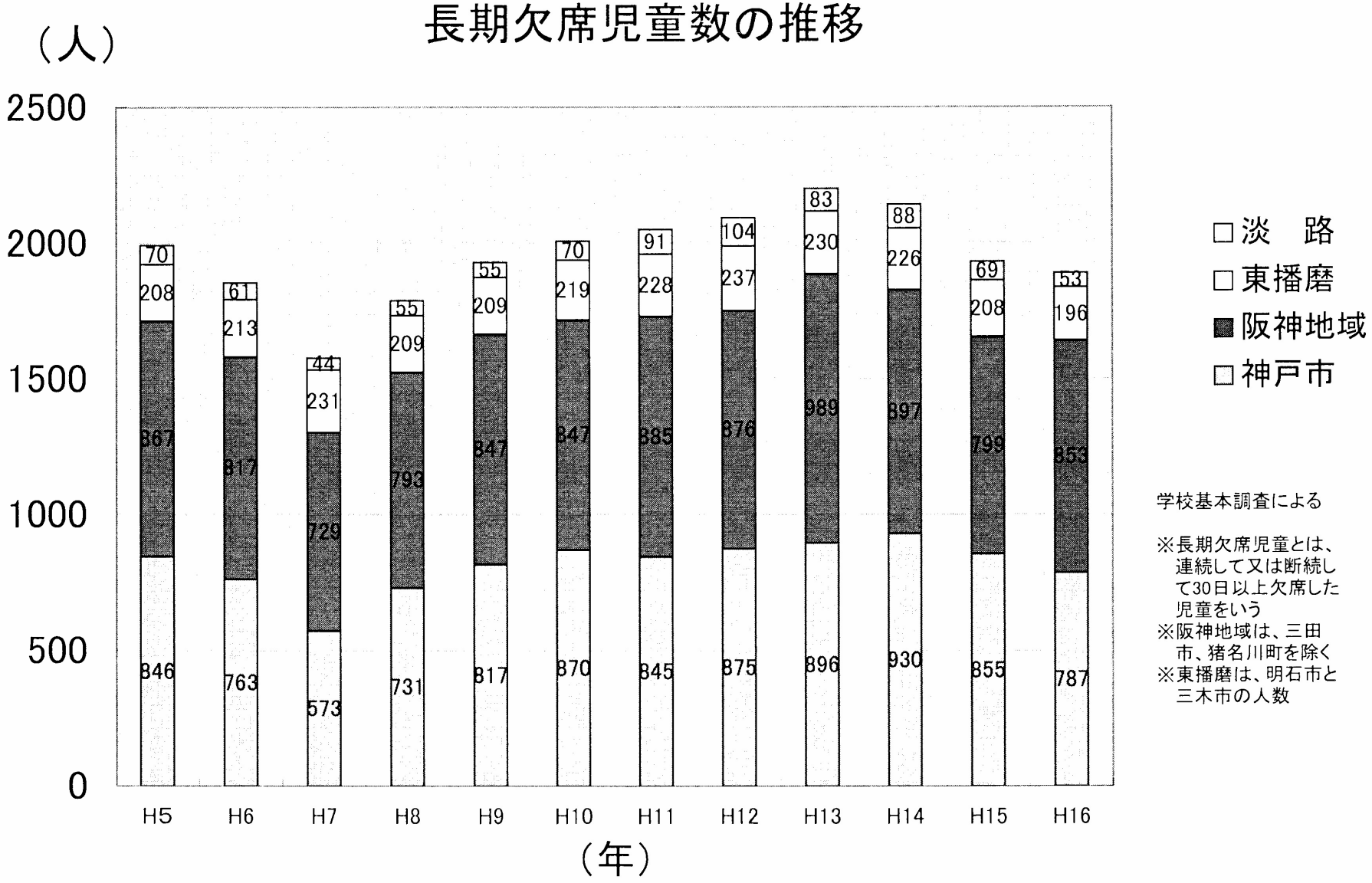
この地震を通していろいろなことを考えた。先生が「人の痛みがわかる人になれ。」と言っていた。本当に、人の痛みのわかる人になりたいと思った。』

『今私にできることは、えっちゃん（亡くなったクラスメイト）の分まで、絶対に生きなければいけないことで、えっちゃんや八人の人と五千人以上の人達の分まで一生懸命生きようと思う。』

『水や電気やガス、一月十六日まで、あたり前の様に使っていたものが、どんなに大切かを知りました。一日でも早く元の生活に戻りたいけれど、もし戻っても、このありがたみだけはわすれないでいたいと思います。そして、日ごろそばにいた人が突然いなくなることが、どうゆうことなのか、この体験を通してもっとよく考え、今を大事にしなければいけないと思います。』

『政治は本来、弱い立場にある人の味方であるはずなのに、そのような人を救えなかったことを何よりも問題とし、反省すべきです。これから神戸は新しく生まれ変わるでしょう。耐震設計はもちろん大切だけど、車椅子の人やお年寄りが行き来しやすい、段差や階段の少ない思いやりあふれた街に生まれ変わることを望みます。それが私達から亡くなった人々への一番の贈り物になると信じています。』

長期欠席児童数の推移



学校基本調査による

※長期欠席児童とは、連続して又は断続して30日以上欠席した児童をいう
※阪神地域は、三田市、猪名川町を除く
※東播磨は、明石市と三木市の人数

アンケート調査結果　　【青少年関係団体】その１

	兵庫県スポーツ少年団	野外活動協会（OAA）	日本青年会議所 兵庫ブロック協議会	兵庫県BBS連盟	神戸市少年団
地震発生前の状況					
団体の主な活動内容	・県内外との交流事業 ・指導者及びリーダー育成事業	・勤労青年の育成及び仲間づくり活動 ・職域、地域リーダー養成 ・はりまハイツ運営	豊かな社会づくりのためのまちづくり、青少年教育などの社会的課題に関する活動	・保護観察少年に対する友達活動 ・社会を明るくする運動	・教室活動（柔・剣道） ・各種スポーツ大会開催 ・集会活動（キャンプ、登山等） ・少年団野球 ・音楽隊活動
ボランティア活動の有無及び内容	していない	していない	子供達や留学生などとキャンプ、わんぱく相撲などの活動	上記の活動	していない
地震発生時の状況					
活動の内容	団体としてでなく市町スポーツ少年団として募金活動を実施	被災児童の心のケア事業を各避難所で実施	各避難所におけるボランティア活動及び各地域における物資のとりまとめ、搬送並びに義援金募集		特になし
活動に要した費用とその負担元	ボランティアとして無償で実施	ボランティアとして無償で実施	団体負担及びボランティアとして無償実施		
復旧・復興過程の状況					
復旧・復興活動の期間	1ヶ月以内	2ヶ月	1年以上		
上記の活動が新たな活動に結びついたか			具体的には無いが、活動地域選定や子供達の将来を考えた事業を提案・実施した		震災特例による新規事業の実施（みんなでチャレンジ事業など）

震災の経験・教訓をどのように情報発信していくのか		職域、地域で開催される講演会等で講師、トレーナーとして教訓を伝えていきたい	未定であるが、団体としての役割を再認識しながら活動していきたい		

アンケート調査結果　　【青少年関係団体】その１

震災で困ったこと					
発生から復旧・復興過程で困ったことは	活動場所の倒壊により、活動場所の確保に苦労した	・行政からの補助金減額 ・はりまハイツの利用者減	2週間を過ぎる頃から救援物資のアンバランスが生じてきた（必要物資が搬入されない）	活動できる会員が少なくなった	恒例事業の一部実施不能
上記を踏まえ、国、県、市に望むことは		団体とのつながりを深め、ニーズをさぐるために必要な支援	危機管理を考えるとともに、緊急時マニュアルの周知徹底が必要		
その他					

アンケート調査結果　　【青少年関係団体】その２

	兵庫県青少年赤十字協議会	神戸フットボールクラブ	神戸YMCA	兵庫県世界青年友の会	兵庫県ユースホステル　協会
地震発生前の状況					
団体の主な活動内容	・生徒例会（研修会） ・合宿研修（トレーニングセンター） ・NHK海外助け合い募金など	神戸青少年サッカースクールの運営	・教育事業(幼稚園、予備校、専門学校等)・ウェルネス事業(体育、野外活動等)・福祉事業(保育園、学童保育等)	諸外国政府へ派遣する青少年代表を受け入れ国際交流を行う	
ボランティア活動の有無及び内容	ボランティア活動の支援活動が本協議会の目的であり、加盟校に対する資料提供や研修機会の提供を実施	同上	・青少年活動支援(スポーツ等) ・国際活動支援（留学生支援、募金等） ・電話相談（いのち） ・障害児ケア	上記活動のほかJICA研修生へのハイキング、料理会などのプログラムの提供による市民との交流	
地震発生時の状況					
活動の内容	加盟校毎に避難所支援、仮設住宅訪問、義援金募集 義援金配分に係る遠隔地避難者調査	避難所の運営（県立神戸高校） 特に子供達に対するサッカー教室の開催	・炊き出し（避難所） ・保育サービス（避難所） ・仮設入居者支援 ・アルコール依存ケア ・独居家庭訪問	受け入れていたオーストラリアから代表団の避難場所、安全の確保	・板宿地区を中心に炊き出しなどの食糧支援 ・芦屋市保育園において園児、市民と焼き芋づくりをした
活動に要した費用とその負担元	本協議会ではなく関係者が負担	ボランティアとして無償で実施	・団体負担及びボランティアとしての無償実施	友の会で負担	協会負担及びボランティア
復旧・復興過程の状況					
復旧・復興活動の期間	1年間	半年間	1年2ヶ月	半年間	7ヶ月
上記の活動が新たな活動に結びついたか	研修メニューへの反映（避難所運営、ボランティアセンター立ち上げ、救急法）		従来の活動の延長線上である。	留学生に対する相談会の開催（2回）	長田神社前における鎮魂ロウソクの提供(花の種入り)

震災の経験・教訓をどのように情報発信していくのか	上記のようなメニューの開発を行い赤十字ネットで他府県に伝えていきたい		10年を契機にボランティア活動などについて再度検証する機会を持ちたい	避難経路図を作成し、機会ある毎に会員に紹介	

アンケート調査結果　　【青少年関係団体】　その２

震災で困ったこと					
発生から復旧・復興過程で困ったことは	加盟校では多くの問題を抱えていたが協議会としては特にない ただ、協議会の研修が大いに役立った	神戸市内のグランドが仮設住宅、ガレキ置き場となっていたため活動ができなかった	被災者が被災者を支援していたため、様々な面でサポートが必要であった	連絡がとれにくい状況が続き、3月になってやっと役員会が開催できた	地震による従前事務所の被災により書類整理に時間を要した そごう館内の事務所は百貨店の経営状況もあり撤退せざるを得なかった
上記を踏まえ、国、県、市に望むことは	震災復興やこころ豊かな人づくりに役立つ青少年赤十字を学校教育の中に取り入れやすくできるよう支援して欲しい		市民活動に対する教育を望む	支援センターを平時から設置し、緊急時に備えるべき	
その他					
			アルコールケアについてのみ2003年3月まで活動した	県外からの多くのボランティアに支えられたが、避難所などで苦難を支え実行したのは青少年活動の実践者、経験者であったことを忘れないで欲しい	

アンケート調査結果　　【青少年関係団体】その３

	神戸YWCA	兵庫県少林寺拳法連盟	ガールスカウト日本連盟兵庫県支部	尼崎市子ども会連絡協議会
地震発生前の状況				
団体の主な活動内容	・女性の自立と成長のサポート ・女性のリーダーシップ養成 ・青少年育成、社会奉仕、環境等学習	・地域貢献活動 （開祖ディー月間の5月）	・少女と若い女性のための社会教育活動（キャンプ、ハイキング ・国際交流 ・地域ふれあい活動 ・奉仕活動	・地区子ども会への支援 ・指導者研修 ・ジュニア研修 ・市民祭り参加
ボランティア活動の有無及び内容	自由意志、無報酬、奉仕の精神により様々な活動を展開 特に高齢社会対応や幼児のための解放の場の創設	・毎年5月に川、公園、海　岸の清掃や街の美化 ・募金活動（福祉施設への寄付） ・交通安全事業	・ユニセフ募金活動 ・老人ホーム訪問 ・地域行事への奉仕 ・平成15年まで10年間アフガン難民の子供達に学用品等を送付	・社会奉仕（公園、河川清掃等）
地震発生時の状況				
活動の内容	・YWCA救援センターを立ち上げ支援、巡回 ・物資無償配給 ・風呂、炊き出し、情報提供	・連盟災害対策本部設置 ・ボランティアテント設置 ・避難所、仮設住宅における支援活動 ・炊き出し、ご用聞き	・入浴、水汲み、清掃奉仕 ・老人や子供達の話し相手 ・募金、炊き出し、物資仕分け	団体も指導者も子どもも被災したため、当初は状況把握に努めた。 ・県子連からの救援物資の分配 ・被災子ども会への支援
活動に要した費用とその負担元	団体の負担、ボランティア及び震災復興基金活用 個人、法人からの寄付金	全国支部、会員、個人、会社などからの義援金	各団の負担	団体の負担及びボランティア
復旧・復興過程の状況				
復旧・復興活動の期間	3年	1年	各団により異なる	
上記の活動が新たな活動に結びついたか	・具体的な福祉活動の拠点となった ・高齢者、親子支援プログラム開発・研修実施 ・野宿者サポート ・配食サービス、ミニデイサービス、障害児サポートなど多種	・災害1周年の集い開催 ・少林寺カッテボランティアの設立		・団体も関係者も被災していたため、子どものケア活動に取り組んだ。 ・地区、単位の子ども会の活動をリード

震災の経験・教訓をどのように情報発信していくのか	・震災後は「ボランピア通信」、現在は「わいわい通信」で震災の状況を全国発信 ・被災者から不況で野宿せざるを得ない者へと支援活動が広がった ・救援センターを立ち上げたことで地域と団体が密接な関係となった	非常時に自発的に行動できるよう会員を育成していく	キャンプ等で経験したテント生活、野外炊事、水汲みが役に立ったことから、活動の3つのポイントの一つである「自然とともに」を大切にし、震災の教訓を生かしていきたい	他地区より受けた支援に感謝するとともに、子供達のたくましさ、笑顔に被災者は未来に向けての活力を与えられたこと
震災で困ったこと				
発生から復旧・復興過程で困ったことは	・行政レベルでは3年で復興したような情報を流したこと ・神戸空港を優先課題としたこと ・孤独死など高齢者の高齢者心のケアが不十分 ・街の復興が優先され住民への配慮が乏しかった	被災者に声かけを行ったが、復興に係る資金や住宅、仕事について尋ねられても答えようがなかった	・水の確保	・支援物資が送られてきたが、廃品回収のようなものまで送られてきた。 （古着や首の取れた人形など）
上記を踏まえ、国、県、市に望むことは	・自らも被災しながら寝食を忘れてボランティアで支援活動する個人、団体への財政的サポート ・被災者へのケアは該当者がいる限り打ち切らない	道路整備	公的施設の復旧、復興とともに住宅の建設支援の大切さを痛感している	・生活物資はより早く現地に、そうでもない物資は少し離れた所に拠点を設けて選別すべき
その他				
	・地域に根ざしたボランティア団体として成長できた ・市民の立場から行政に働きかけることが可能となった ・復興は終わっていないボランティア活動を通じて一人ひとりが活性化することを望む	これまでも一日も早い復興を願い活動してきたが、今後も損得で行動するのではなく非常時には迅速に行動する気概をもって活動していく	女性の団体でかつ成人会員の多くが主婦であったことから家族のことで精一杯となりボランティア活動が困難であったこと。 安全性や機動力といった点からも震災直後の救援活動には無理があった。	子ども会が元気になることが真の復興と言える。 皆それぞれ心に傷を負っているが、未だに癒されていない。大人は弱いものです。

アンケート調査結果　　【青少年関係団体】その４

	日本ボーイスカウト兵庫連盟	兵庫県子ども会連合会		
地震発生前の状況				
団体の主な活動内容	青少年の健全育成を目的に、県内各地で野外活動、奉仕活動などを実施。	遊びを通じた児童の健全育成 ・子ども自然の村の建設・運営 ・子どもの手による子ども会活動の支援 ・指導者養成、研修 ・子ども会活動プログラム開発		
ボランティア活動の有無及び内容	年間を通じて奉仕活動を訓練の中に取り入れている。 ・各種募金活動（ユニセフ、共同募金、緑募金等） ・障害者スポーツ支援活動 ・清掃美化活動など	・災害時の募金活動 ・地域クリーン活動		
地震発生時の状況				
活動の内容	・震災救援対策本部の設置 ・避難所等における救援・支援活動（物資運搬、子どもの遊び相手など） 県内各地から109団が参加 （述べ33,910人）	被災児童の心のケアのために ・おもちゃステーション設置 ・ふるさとホームステイ実施 ・遊びんピック開催		
活動に要した費用とその負担元	ボーイスカウト日本連盟を通じた義援金、見舞金	全国子ども会連合会及び近畿地区子ども会連絡協議会からの義援金		
復旧・復興過程の状況				
復旧・復興活動の期間	4ヶ月	3年		
上記の活動が新たな活動に結びついたか	日頃の訓練の中で、 ①家庭・学校・地域との連携プレーの必要性②家庭での助け合いの必要性などをスカウトの誓いの実践として取り組んでいる。	・子ども会に関わりのなかった者がボランティアとして関わるようになり、子ども会への理解者が増えた。 ・遊びの重要性を意識した取組みを実施するようになった。 ・被災地とそれ以外の地域との交流が生まれた。		

震災の経験・教訓をどのように情報発信していくのか	・複数行動 ・バイク等の利用による活動の迅速化、 ・健康管理（睡眠等）による活動の持続性確保など	・「おもちゃステーション」と「ふるさとホームステイ」事業が一段落した時に支援者にお礼と被災地の思いを伝えた。 ・今年度フォーラムを開催し、震災の取り組みや評価を発信する。 ・震災時のパネルを作成展示		
震災で困ったこと				
発生から復旧・復興過程で困ったことは	被災地支援で現地に行った時、軽トラ、ブルーシートなどの必要機材がなかったこと	・被災地とそれ以外の地域で温度差がありすぎ、震災直後は実感の共有ができなかった。 ・子ども会事務局職員が全員被災地であったため、しばらくは団体としての活動ができなかった。		
上記を踏まえ、国、県、市に望むことは	緊急時に備え ・飲料水、衣服、寝具や避難場所、医療器材の確保 ・防火工具、避難所運営システム確立、正確な情報提供 ・救援復興の財源確保	・子どもに視点を当てた取り組みが必要。 ・専門団体が機能し始めれば、財政支援にとどめる。 ・マスコミ報道の有無により、支援（人的・物的）に濃淡があったので、マスコミ情報発信の調整が必要。		
その他				

アンケート調査結果　　【支援団体】

	あしなが育英会	ライオンズファミリーホーム	ロータリー子どもの家	神戸市こども家庭センター
震災と活動支援				
被災した子どもは従来より支援してきた子どもの「心の傷」に違いはあるか	他の遺児と比較して心の傷が深い 具体的には、ガレキの下で自分が死ぬかも知れないという恐怖や親が死に自分が生き残ったことが納得できなかったり、転校、転居がもたらす生活の厳しさなど			・個々人に起こった問題ではないことや住環境や生活の変化を伴っていたことなどによる違いがあった 関連して、保護者の抱える生活再建における不安の影響もあった ・単発的なトラウマと持続的なトラウマによる違い （具体例） 退行現象、無気力、体調不良、感覚的恐怖、神経症的症状、体調不良など
違いがある場合支援（相談）にあたりどのような工夫をしたか その結果はどうか	継続的、日常的に心のケアを行うため、「レインボーハウス」を建設した。（11年1月） 結果はまだ見えてこないが、自分のことや他の遺児のことが考えられるようになった（ハウスに来ない遺児と比較すれば）			・アウトリーチを意識した相談と救援活動 ・仮設入居児童に対するケア（アンケート、電話問いかけ、緊急訪問） ・拠点調査（拠点保育所調査、保育所巡回事例検討会、保育所個別聞り調査） ・３歳児健診ケア（心の相談コーナ設置） ・保護者に対する相談　等
被災した子どもに特別な支援(相談)をした場合、それに要した費用はどうしたか	募金活動による		義援金による活動	団体で負担、関係者のボランティアとして無償及び各関係団体で負担(自治体含む。)
震災を契機に団体の活動に変化はあったか	・「レインボーハウス」の建設 ・心のケア活動から波及したものとして「国際的な遺児の連携を進める交流会」活動を行っている ・育英会の活動方針が「進学支援」と「心のケア」の二本柱で明確に位置づけられるようになった		震災を契機に世界各国からのロータリークラブの義援金によって建設された施設である。	・すこやかテレホン０１４５の設置

アンケート調査結果　　【支援団体】

震災で困ったことについて				
支援（相談）活動を実施するにあたってどのようなことに困りましたか	遺児探しにあたって、プライバシーの関係で学校や行政から遺児を教えてもらえなかった当ハウスもプライバシーを守ることになっているが、緊急時においては、本会へ理解を頂いていれば、もっとスムーズに活動が展開できた	当ホームが被災し、しばらく他施設に間借りしていたが、当ホームには沢山の支援物資が搬送された時には他の施設に対して申し訳なく思った。（当施設はNHK番組で紹介された。） 物品を差し上げる場合にも受け取られる方の気持ちも色々であった。	仮設住宅入居中の親子の支援については、毎週1回継続した活動を長期間行っていたが、継続してボランティアを確保することが困難だった。	・施設被災による物理的環境整備、職員も被災しケアが必要であったが不可能であった。 ・あまりにも多くの支援が必要となったが、体制が整わなかった。 ・通常の相談業務の休止 ・部分的ではあるが、外部からのボランティア活動は一時的で継続性がなく、連携もなかった
上記を踏まえ､国や県､市などの行政や地域、家庭にどのようなことを望みますか	将来的には学校、警察、消防、行政が遺児の心のケアの場所を紹介するとか、地域の人はボランティアとして参加するとか、ゆるやかな連携が望ましい	支援物品はセンター機能を有したところで一括して受領し、そこから各施設に平等に配給するシステムを構築して欲しい。 支援のための休暇制度を創設して欲しい。（いわゆるボランティア休暇）		・地域で継続的に活動している団体と一時的な団体との役割分担を明確化し、コントロールする機能を行政に求める。 ・人も金もボランティアに依存せざるを得ない実態。 ・家族には望みようがない。
震災の経験や教訓をどのように継承、発信していくのか	レインボーハウスで震災以外の遺児の心のケアを行う、「国際的な遺児の連携を進める交流会」を継続して開催する、東京にもレインボーハウスを設置するなど、震災遺児の心のケアのノウハウを他の遺児や海外の遺児、他の地域に広げていきたい	入所者を対象として ・防災訓練を実施する ・防災センターの見学（年1回） ・食料品、日用品、水等の備蓄 ・非常時持ち品を各自用意する	当初は被災親子や家族の支援であったが、被災児童を含めた子育て支援や地域福祉活動へと活動の環を広げてきている。 10年近くの活動を通じて数多くのボランティア活動や専門家が活動に加わってきているが、当施設の活動に参加した人たちが、それぞれの思いを大切にして家族や周囲の人たちに伝えていくことが一つの継承となっていくであろう。 また、地域の子ども達を対象に音楽や絵画、ストーリーテリングなどの活動を通じて子どもの心のケアを行っているが、こうした活動は今後も継続していく	・心のケア研究報告書 ・事業報告書（神戸市児童こころの相談110番）の作成